校 長 失 格

石 川 希 理

アクトス増刊号

校長失格

目次

感電・頭と歓迎会　1
修学旅行　8
戸締まり用心　14
あとのまつり　20
校長のおしごと　26
校長の名前で出ています　35
洪水　41
卒業証書を授与します　47
ここからへりくつ　おわりのはじまり　ワクワク残日　53
校長になるには　59
解説　『校長失格』　阿倍野友之　69

感電・頭と歓迎会

「校長先生、感電ですよ、感電！」
　P先生が、私の顔を見て早口でいう。
「生徒？」
「そうです。いま救急車で。奥にまだT先生がいます」
　土曜の朝の九時ごろである。
　私は勤務先の中学に近いところに住んでいる。自転車で十分少しというところか。赴任してからは土日にも学校の様子を窺いに行くことにしていた。
　しかしまだ、着任後半月、四月半ばである。
（おいおい、冗談じゃないぞ…）
　何もしないのに少し息が弾む。ねっとりとしたざわめきが体育館を満たしている。
　他校の生徒たちがいるフロアーを避けて、左手の階段をあがると、二階通路を急ぐ。

　正面の舞台上で、T先生の大きな体躯が落ち着きなく動いている。
（まいったな…）
　チラリ、と、着任してすぐ、校長室の机の引きだしに入れた退職願が頭をかすめた。
　なにせ、感電事故である。
（そんなこと…、あるのか？）
　不思議な気がする。体育館は一年前に完成したばかりだ。感電するような場面が思い浮かばない。第一、感電事故など学校ではまず聞かない。
　舞台に降りるとT先生が、怪訝な表情で私を見た。
　二週間前に赴任したばかりの校長である。まだろくに話をしたこともない。しかしさすがに顔は覚えていたらしい。
「あ、校長先生！」
「どなした？」
　T先生は口をとがらせて声を絞りだした。

市内の中学校バスケット部対抗の練習試合会場である。審判の先生や役員が、舞台上に長机をだして本部にしている。舞台の上からなら会場全体が見渡せて、指示もだしやすい。

当然、湯茶の用意もある。持ってきた電気ポットのコードを、生徒にコンセントに差し込ませたところ、ボンと音がして、感電したという。

「状態は？」

一時、気を失ったようで、救急車を呼び、バスケット部顧問のS先生が付き添って市民病院に搬送した。そこまでしかわからない。

事故対応で、市教委からは総務課長が来られた。もちろん学校教育課も関係してくる。普通、総務課は関係ないのだが、もし体育館施設の不備であるならば早急に対策を練らねばならないからだ。

（おちつけ）

と自分にいい聞かせる。しかし、慌ててはいない。心に鎧ができて外の雑音を遮断する準備ができている。

ビビリ、小心、神経質なくせに、土壇場になると居直りができてしまうという性格は直らない。なんのことはない、坂口安吾流、破滅型、猪突猛進型なのだ。

市民病院に突入する。ややあってS先生と会うことができた。

「申し訳ありません。責任はぼくにあります」

S先生が無精髭かどうかわからない髭を撫でて、目玉を剥いて私に口を開く。

「生徒は、大丈夫ですか」

「はい、大丈夫です。指の先が少し焦げているようですが、いまのところ異常ありません」

S先生は教師に見えない。いい方は悪いが一見『渡世人』風で、がっしりした体躯である。だが、話してみると、実に丁寧だ。

この先生が、私の四月一日の赴任時に「校長先

生、いまのいい方おかしいですか」と突然いいだした方だ。その場面はこの随筆集には収録していないが『まことに悪いが異動を命ず』の中に出てくる。

こんな風であった。

赴任初日の職員会で学校経営方針を述べ、とにかくホッとして腰を下ろした私に、突然S先生が尋ねた。

「校長先生、いまのいい方おかしいですか」

新任教諭は子どもに試されるが、新任校長は先生に試される。

S先生は女性のY先生と体育館の使用について、語気鋭くいい合いをしていたのだ。

赴任直後の私には経過や中身はよくわからない。

しかし、S先生は私を見つめ、他の職員も様子を窺っている。

「来たばかりで、内容はよくわかりません。議論は結構ですが、言葉遣いには気をつけてください」

「わかりました」

まだ何かあるかとかまえている私に、S先生はあっさりと身をひいた。軽いジャブであったようだ。

こういうことがあったので、私はS先生をしっかりと覚えていた。

結局、生徒の怪我は、大したことはなかった。電気ポットにつなぐ古い延長コードのプラグが緩んでいて、コンセントにさした途端にショートしたらしい。

それで生徒はショックを受け、発生した煤で指先が真っ黒になった。指はしびれていたらしい。

驚いたであろう。しかし、水に触れたりしないでよかった。

明くる日には保安協会からも検査が来た。

「感電というより、ショートですよ。が、大したことがなくてよかったですね」

検査員が私を見る。感電事故で報告があがってきたのでおおごとだったそうだ。

私も驚いたし、市教委も一時ひっくり返った。体育館で生徒が感電事故となれば、これは大事故だ。しかも救急車が出動している。

「すみません。緩んでいたのに気がつきませんで。ぼくの責任です」

S先生はごつつい外見の割に細やかである。

「気にせんでええよ。けどコード点検してな。それから今回の場合、救急車は正解。はっきり切り傷程度という場合以外、頭の事故とかは、救急車は呼ばなあかん」

私はそう決めていた。救急車を呼ぶと、学校事故が公になる。だが、明らかな軽傷以外は素人判断してはいけない。

それから六日後、赴任先のD中学で歓迎会が行われることになった。

この中学の職員歓迎会は有名である。何か『芸』をしなければ、仲間に入れない。親睦会に○○会と特別な名称があり、『芸』が合格すれば『入学を認める』というのだ。

「□□校長は仮入学で、入学せずに卒業してしまった」とか「△△は入学を認められなかった」とか、単なるお遊びにしてもプレッシャーがすごい。わかりやすくいえば、体育会系のノリなのだ。

私も民間にいたときや、県の行政職のときなど、親睦会などでは、お遊びに参加していた。あまり得意ではないのだが、カツラを被って熱唱したり、安木節の踊りに参加したり…。

昔学校が荒れていたときに職員の団結を深めるために催されたと聞く。

（わかるがなあ…）

ため息を吐く。私が二十年ほど前に勤務してい

た中学は荒れていて、週に一度は飲み会をしていた。そしてこの時代の仲間は十名ほどがいまだに集まったり、一緒に旅行したりしている。

だが、やはり親睦も行きすぎたものはいけない。誰もが楽しめないといけない。団結ならば、文化祭で職員劇をする方がよほど役に立つ。何回も苦労して練習し、また誰でもできる。演技がダメなら大道具でもよい。

だがこういった大学体育会系のノリは、古沼のぬしが新しい者に挨拶を要求するに似ている。

「いじめや」

と、赴任先の中学でも問題になってはいるらしい。

だが、やり過ぎはよくないと誰も思いつつ、やめるとはいいだせない。一部の体育会系の者だけがのっているのだが、彼らにしても後味の悪い歓迎会に違いない。それが見えない時代環境ではないはずだ。

とはいえ、私も赴任して一ヶ月、まず、なんとか入学させてもらわねばならない。歌を三つほど稽古してみることにした。

ところが、当日夕方、職員の過半が先に歓迎会の会場に出て行った後、事故が起きた。

今度は、柔道部で練習中に、頭を強打したという。しかも本人が痛いと訴えている。

（おいおい、赴任一ヶ月にもならないのに、感電に続いて、頭の事故か…。）

私は忙しく考えた。近くの脳神経外科に生徒は入院し検査を受ける。

「様子見に行くわ。状況によるが、とりあえず歓迎会は、私抜きで、はじめといて」

芸のことが小さく頭の隅にうずくまっている。『芸をせんですむか…。しかし歓迎会に校長がいない、ですましてしまうというのもな』と思う。

が、まず生徒のことだ。

病院に着く、生徒の親族も来られる。

病室に担当の教師や養護の先生とともに入る。親族の方は校長までこられたと、盛んに恐縮される。

とりあえずは大事ないらしい。二、三日入院し、精密検査となる。もう歓迎会のことなど頭からとんでしまっている。

お詫びをして、職員と病院を出る。

八時である。

拍手で迎えられた。

芸が始まっている。若い男性教師が女装したり、座敷の真ん中でサーカスもどきの跳びはねをしたり、見ているだけには、なかなかに面白い。

私はみなさんがご存じない歌を唄った。「大楠公」とか「箱根の山」とか、少し時代がかっている。感情込めてセリフもどきに歌うと結構いけるのだ。

一つ終わると、審査員が数名いて、合格とか不合格とかいう札があがる。審査員には、この儀式を通過して、十年以上勤務し、そろそろ卒業しようかという教師が多い。

こういった体育会系のノリの悪い点は、自分が堪えてやったので他人にもやらせようという気持ちである。大戦前の旧軍のいじめに似ている。陸軍ビンタに、ミンミンゼミ。柱につかまってセミの真似をする。海軍は精神注入棒の尻叩き。洗礼を受けた者は、後輩にそれを倍返しする。理不尽な暴力やいじめが、耐える強さに美化される。

（ということは、それを教育にも持ち込んでいたんや・・・、クラブでの体罰、クラスでのビンタ・・・。私も昔、やったな・・・）

年に一度くらいした覚えがある。そうしないと「指導が手ぬるい」と見られる空気があった。父親の暴力とＤＶの嵐の中で育った私は権威・権力には反抗する。ところが情けないことに権威・権力に畏怖し、屈服する弱い面も併せ持っている。頭の中を苦い風が吹き抜ける。

歌い終わって、「まだまだ」という札をもらいなが

ら、私は会場の面々を見る。

二十一世紀に入って四年、スポーツの世界でもようやく体罰が姿を消しつつある。体罰より厳しい合理的な練習と、愛情の方が世界に通じる力を身につけることがわかってきている。ステートアマより、欧米先進国ではスポーツクラブなどで科学的練習を積んだ人がのびのびと活躍している。そこでは自己責任において、自己をコントロールし、鍛えるという本質的な訓練が行われる。それは言われるままに殴られて頑張るという訓練より遙かに厳しい世界なのだ。

三つ目の歌が終わった。

（三つしか用意してないがな…）

不合格なら何しようか、と思ったときに、職員集団の中核の一人で、剣道部顧問のB先生が立ち上がった。

「合格、合格」

うまいサポートである。

（ヤレヤレ…）

バスケットのS先生とこのB先生は、学校の職員集団の核である。体育会系だが、「文化系の体育会」というような雰囲気を持っている。実際、後日、殴らないで生徒を奮い立たせるすばらしい体育大会を見せてもらうことになった。

しかし、この二人にして、なかなかこの歓迎会は変えられないらしい。

（しかしまあ、なんとかなりつつあるな）

ホッとしながら、私は冷たくなった座布団にゆっくりと腰を下ろした。

修学旅行

全日空３０３便が大地を離れた瞬間、「わーっ」「キャーッ」ともの凄い歓声と悲鳴。

歓声がおさまると今度は「ぱちぱちぱち」と拍手が起こる。大きな飛行機だが、機体が揺れている気がする。

Ｄ中学三年生は二百十三名が沖縄へ向かう。その集団があげる声と拍手である。貸し切りではないから、一般の乗客は苦笑いしている。

生徒たちに聞くと、八割方が、飛行機は初めてらしい。

「こんな大きなものよう飛べるな」

「何で飛ぶんやろ」と話している。

なるほどなるほど、私は心で頷きつつ耳を澄ましている。

理屈はわかっている。ジェットの推進力で翼に揚力が生じ、機体を重力から持ち上げる。だが、何度乗っても離陸の瞬間は緊張する。ジャンボなら別だがそれより少し小さい機体だと、主翼がしなうのまでわかる。

「折れないのか」と思う。だから離陸するとホッとする。今回、実は私も生徒に同調して拍手したいのだ。だが、校長が拍手しては「いかにも」である。

機内を眺める。生徒たちは座席のイヤホーンを試したり、電灯をつけたり消したり、探検に余念がない。

私はニヤリとしながら目を閉じた。

大阪空港（伊丹空港）から二時間あまりの沖縄修学旅行の開幕である。

この日の朝、私は四時ごろに起きて、五時過ぎに学校に着いた。

生徒たちは六時半集合だが、先生たちは五時半集合である。最終確認と欠席連絡待ち、生徒指導に分かれる。

校長の私は、早々に集合場所の武道場に向かう。最近の中学には体育館とは別に武道場もあるのだ。ただし、私が中学生の時にあった講堂は姿を消している。講堂として体育館を使うのだが文化的には残念なことである。

晴天が有り難い。沖縄が雨では、折角の旅行が半分は無駄になる。五月末のこの時期には雨が多いのだ。

六時前になると、生徒たちが現れだす。六時半集合ということは、集合が完了するということだ。それにしても早い。

武道場の前では生徒と、チラホラついてきた保護者がたむろしている。

私も外に立っていることにした。

ＰＴＡ会長と、地域の補導委員、二年生・一年生の学年主任、学年生徒指導担当者などが見送りに来ている。

挨拶しつつ待つ。

六時半から、出発式である。幸い突然不参加などのアクシデントはない。点呼と健康チェック、持ち物検査。その後校長の挨拶をすませる。旅行社の係員の紹介があり、諸注意があり、学校近くのバスまで歩き出す。

私は、武道場の前で生徒の長い列を見ている。みんな顔が輝いている。

全員がバスに乗り終わると、見送りを受けて車列が動き出した。

定刻の七時十五分である。高速道路は空いていて、八時十分に伊丹空港に到着。

（それにしても・・・）

落ち着きだした機内の生徒たちの雰囲気を感じつつ、修学旅行の変化の激しさを思う。

私は昭和二十二年・一九四七年生まれの団塊の世代である。一九六一年、神戸市の中学校での修学旅行は、「希望号」という修学旅行専用列車で東京までであった。新幹線もなければ、ディズニ

ーランドも、成田空港もなかった。東京オリンピック以前だから、日本初の超高層ビル、霞ヶ関ビルも建っていない。カラーテレビが普及しはじめていた時期である。いま時流行のパソコンや携帯は、三、四十年以上も後のことだ。

希望号で七時間以上もかかって着いた東京では、皇居に議事堂、東京タワー、羽田空港の見学。大阪にも空港はあるのだが、一九六四年の東京オリンピックの年にジェット機の乗り入れを開始しているから、羽田よりずいぶん遅れていたのだ。因みにこの年に海外旅行が自由化されている。

宿舎は学生会館というコンクリートの檻のような建物であった。まだ食糧管理制度があり、お米は配給制で容易に入手できず、生徒たちは一人ひとりお米を持っていった。

飛行機の中で私は苦笑いした。

昔のことを想いだして、「昔は」といいだすと年老いた証拠らしい。

「それにしても・・・」またしても、変化が凄まじいことに唖然とする。

中学教員になったので、立場は違うが修学旅行に出かけたのは数回以上になる。

一九七八年に初めて三年生をクラス担任として引率した。

東京だった。

新幹線は速い。箱根近くで降りて大涌谷や白糸の滝を見物した。その後東京に入って議事堂・皇居・東京タワーを見物した。もう、羽田空港見学はなかった。空の旅が普及期に入ろうとしていた時代である。成田空港はこの年に開港しているが、反対闘争はその後も暫く続いていた。

それからも三年生を持つ度に旅行に出かけた。

一九八三年に東京ディズニーランド（ＴＤＬ）が開園すると、修学旅行はここが目的地になった。「いいなあ」と、行けなかった卒業生がいう。まだ気楽に東京へという時代ではない。それが始まろうと

していた時期である。

引率の先生は比較的気楽になった。ＴＤＬの中に入れば、安全・安心である。いろいろとあるとはいえ、一日、園内を監視して、定点でチェックしておけばよい。生徒は疲れて夜はよく眠る。

しかし、ＴＤＬが普通になると、「何のための修学旅行か」という議論が起きた。

もともと、人生の中で東京へさえ行くことのなかった時代、故郷を離れて社会勉強をするのが第一の目的である。だが、新幹線で三時間半ならば、日帰りさえ可能なところだ。しかもＴＤＬは娯楽施設である。

一般的に修学旅行の行き先は、保護者や生徒の意見を聞いた上で、学年単位で決定できる。しかし、学年毎に行き先が違うというのもおかしいので、何年かは同じところが続く。また、同じ市内の中学校ならば、大体の傾向が似通ってくる。

近畿から遠くて、社会勉強の地として「九州」が次の目的地になった。長崎や熊本である。船も使う。歴史学習ができるし集団生活の訓練としてもよい。

ところが、一九八十年代から、九十年代初めにかけて、中学校は荒れた。修学旅行は悲惨なことになった。

修学旅行の引率は大変な仕事である。朝早く出て、就寝まで生徒に振り回される。新幹線や船の中でさえ、おやつ・弁当・後始末・健康チェックでバタバタする。バスに乗ればホッとするが、窓から手や頭をだす生徒もいて気が抜けない。

「こら、窓から、足、だすな！」と私は注意することにしていた。

一瞬みんな（足なんかだしてる奴は誰だ？）とギクリとして、それから爆笑する。しかしそれで頭や手は引っ込める。

ガイドさんも中学生相手だと、四月採用の新米の方が多い。懸命にガイドブックを読む。そのガ

イドブックを隠したり、おちょくる生徒が出てくる。一度などは泣かせてしまって、それをなだめるのに私が往生した。

「おまえら、ガイドさんをいたわれ」と筋違いの注意をする羽目になった。

枕投げに、ふすまの破損、喧嘩、就寝後の騒ぎと、賑やかな旅である。

しかし、学校が荒れると、このようなことではすまない。とくに就寝後は凄まじいことになる。

午前一時、男子のAと女子のBがいない。

探し回ると風呂場に潜んでいた。

外で買った酒を持ち込んで、夜中に飲んでいた。タバコを吸っていた。

隣の部屋に忍び込むのはご愛敬だが、男子が女子の部屋とか、一緒に酒を飲むためとなると笑いごとではない。

かくして、引率教師はほとんど朝まで眠れないことになる。廊下に布団をだして、入り口で見張る。三日目の記念写真には、校長を含めて全員目の縁に隈ができていた。

そんな年が続いた後、学校は落ち着きを取り戻す。世間では家族旅行が一般的になり、飛行機も日常の乗り物になる。修学旅行は社会見学より体験が主流になった。

例えば信州スキー旅行。これも教師は比較的楽だ。向こうに着けばインストラクターが一日指導してくれる。生徒は疲れ果てて早く眠りやすい。やすいというのは、貴重な三日間なので、生徒もさるもの、興奮してあまり寝ない者も多い。しかしこのスキー旅行は修学旅行というより、自然学校に近い。現在は中学一、二年生あたりで実施している。そこで、遠方で、少し異国情緒に富み、社会体験・学習のできるところ、それが沖縄であった。

昔の想い出に浸りつつ、少しウトウトしたと思ったら沖縄に着いていた。二時間しか経っていない。

全日空のアナウンスがある。

「D中学のみなさん、よい旅行を」

たちまち拍手が起こる。

いい生徒たち、よい旅行になりそうだ。

五月末の沖縄の空気を「ぬるい」と生徒がいう。お湯の感覚である。

まずは首里城から、続いて「ひめゆりの塔」「平和記念資料館」の見学。これはさすがに心に響いたようで、平和セレモニーでは大声で「翼を下さい」の合唱。

生徒たちの元気な声に、私は感動してホッとする。

こうして始まった沖縄旅行は、海での体験、那覇市での班別行動で幕を閉じた。引率の先生方も午前一時か二時には眠りにつけた。

帰りの飛行機は二階席のあるジャンボで、離陸と着陸時にはまたまた歓声と拍手が起こっていた。

修学旅行の是非についての議論はある。が、『青春のメモリー』としてだけでも充分価値があると、私はいま考えている。

◆神戸新聞文芸入選作　平成二十年六月二日（月）神戸新聞朝刊掲載　［二〇〇八年］

戸締まり用心

校長室の机の上、ノートパソコンの時計は午後七時である。職員室から聞こえてくるざわめきは、もうずいぶん少なくなっていた。

時折「さよなら！」という声が暗くなりかかった外から聞こえてくる。グランドでクラブ活動を終えた生徒たちが、帰り始めているのだ。

私は机の引きだしを開けて、校舎のマスターキーと外部トイレのドアキーを取りだした。

緩めていたネクタイを締め直す。夏の間はノーネクタイでいいのだが、来賓や出張が多く、結局つけていることになる。

校長室と職員室の境のドアは、いつも開け放たれている。職員室へ踏み込むとクラブ活動を終えて戻ってきた中学三年の主任、Z先生と目が会う。

「ちょっと、戸締まりしてくるわ」

「わかりました」

戸締まりは半時間ほどかかる。この後、今夜は、八時ごろから三年生の会議がある。

部屋を出ると、風が廊下を吹き抜ける。

体育館の部分で断ちきられたロの字型。勤務先の中学の校舎の建て方である。職員室は東校舎の二階にあり、廊下から正面に西校舎と体育館が見える。その間だけ建物が切れて、西門が望め、北と南はそれぞれ校舎で視界は遮られていた。

私は廊下を北へ進み、北東階段から北校舎の四階にのぼる。

「校長先生、さよなら」

二人の女生徒が勢いよく階段を駆け下りていった。

四階で活動してるのはブラスバンド部と文芸部の生徒である。ほとんど毎日活動し、終了時に北校舎の三、四階を点検してくれるのは主にブラスバンド部だ。だから、きちんと戸締まりできているの

だが、活動のない日も結構ある。

まず廊下の蛍光灯をつけて、北東のトイレを覗く。

戸締まりを始めたころは、トイレの奥まで入り、窓のクレセント錠を確認していた。けれど最近は、目でみて締まっていれば、中には入らない。

校舎の四階から侵入する泥棒がいないとも限らないが、その気になれば、クレセントが壊れたり、窓枠が歪んで隙間のあるところがたくさんある。

通常の企業や市役所などのビルやマンションでは考えられない壊れた箇所も多い。予算が充分ではなく、とりあえず危険な所だけは修理できている。

私はそこから東校舎四階廊下を南に進む。突き当たりは南校舎だが、そこは、一年生の学年が責任を持って戸締まりしてくれる。だから突き当たると南校舎に入らず、再び廊下を引き返す。最後に壁のスイッチで廊下の灯りを消す。

最初のころは、廊下の灯りを消し忘れ、後から気がつくというケースが何回かあった。

北校舎の四階廊下を進む。

「ギシッ」

と物音。廊下のタイルの鳴る音である。このごろはずいぶん慣れて心臓がドンと鳴ることは少なくなった。

外は闇が迫っている。学校は日中が賑やかなだけに、夜になると静けさが異様な感じで迫ってくる。昔は学校で肝試しをしていたこともあった。

北西のトイレを確認し、西校舎に入って廊下の天井を見上げた。

勤務先の中学校は、つい一昨日まで、用務員さんが住み込みであった。しかし、今日からは機械警備に切り替わる。侵入者を感知するセンサーが新たにつけられている。

西校舎の端まで行くと引き返して、北西の階段を下りて、三階に向う。

この戸締まりルートは、代々の教頭先生が経験

的に作りだした最良の道筋である。いかに効率よく短時間で戸締まりに回れるかという観点から編みだされた。私は「もっといい方法はないか」と考えて試したが、やはりこの道筋が最良のようであった。

教室を覗いていた私の目が止まった。

（あらら、かなわんな）

マスターキーで教室の戸を開けて、中に踏み込み、奥にあるガラス窓の上部を閉める。

掃除の時間などに、上も下も開放し、つい上のガラス窓を閉め忘れることがある。もっとも、窓が開いている、ドアが開いているというのは特定のクラスに多く見られる。

職員会議で、「戸締まりをきちんとされるように」と伝える。しかし、学校というところは、こういった側面がルーズになりがちである。教科を教え、子どもに目配りすることが優先される。施設管理も大事だと思うのだが、どうしても忙しい先生方に要求しにくいのだ。

私はこの戸締まり、施設管理が好きである。若いころ民間企業に勤めていたり、市役所の市長部局で管理職をしていたことと関係あるのかも知れない。だから、学校の戸締まりは赴任以来、積極的にするようにしていた。

ある組織がどのような仕事をし、うまく回転しているか。それを見るのは一つには予算を把握すること。ついで、仕事場や備品が適切に管理されているかどうかを観察することだと考えている。夜の学校には、日中の活動の跡が色濃く残っているのだ。

二階から一階、とくに一階の戸締まりは重要である。中学校に金目のものはあまりない。昔は子どもたちから学用品などの集金もしていたが、いまは口座振り込みが多くなった。それでも職員室の先生方の机の中には、多少の現金が入っていることもある。パソコンもたくさんある。

盗みに入るとしたら、一階から入って、二階の職員室を狙うということになる。

だから一階は鍵がかかっているか、すべて見て回る。一階には保健室や特別支援教室、理科室などがあるが、そこは管理する個人が決められていて、まず締め忘れはない。

私は玄関に出て、湯沸かし室の前を抜けて、南校舎の南にあるグランドへ出る。南校舎には、外部からも利用できるトイレがあり、施錠の確認が必要になる。

体育館のクラブ活動が終わっていれば、その後、西門の施錠をする。

「戻りました」

私は職員室で声をかけ、校長室に入った。

毎日帰宅は早くて八時半か九時。夕食はそれ以降なので、まだ、お腹は空いていない。

夜は、八時から校長室で会議があり、その三年生の会議が終わったのは十一時半を越えていた。

「先に、帰ってよ」

私は最後に残ったZ先生に声をかけた。

「それじゃあ、お先に失礼します」

みんなが職員室を出るのを見届けてから、私は職員室を挟んで反対側にある印刷室に向かった。校長室は赴任後禁煙にしたので現在は学校唯一の喫煙室でもある。

灰皿を点検し、職員室に戻り、ガスと水道、学年毎のコーナーにある電気ポットを見る。それから消灯すると、一階の出入り口に向かった。

今夜から、機械警備である。

入り口にあるボックスにカードを差し込んで警備を始動させれば、侵入者を検知する警報機が動き始める。

北校舎の裏から、三年生の先生方の車が出ていく音がしていた。

「さてと」

事前に練習して、教えてもらったとおりに機械を作動させた。

「ビビビビビ」

けたたましい警報音が、西校舎で響いた。液晶画面に警報の位置が表示されている。

口の中が音を立てて乾いた。

（操作ミスしたか！？）

慌てて、警報を解除し、また入れ直した。が、再び警報音がなりだす。

（とにかく解除）

警報音が止まったのでホッと息を吐く。

機械警備開始の初日から侵入者かと思ったが、西校舎の四階はまず考えられない場所である。

「校長先生、見てきましょうか」

学校を出かかったZ先生が走り寄ってきた。

「あ、たのみます」

地獄に仏のような感じがした。なにせ広い構内にただ一人取り残された気分だったからである。ホッとして走りだしたZ先生を見た。

帰ってきたZ先生の話では、警報が鳴っている西校舎四階には何の異常も見あたらないという。しかし、再びオンすると、また鳴りだす。真夜中にご近所にも迷惑な話である。

「警備会社に連絡するわ。先生帰ってください」

「いいんですか」

Z先生は気の毒そうに口を開く。

「ええよ、帰って、帰って、もう遅いで」

時計の針は零時を越えていた。

Z先生の車が出ていくのを目の端で捉えながら、私は警備会社に電話をした。

電話が終わると、出入り口前に立ったまま、夜空を見上げた。

明日もよい天気のようである。

（いや、もう明日になっているか）

苦笑しつつ、頭をかいた。

警備会社は十分ほどで駆けつけてくれた。やはり異常は見あたらない。結局、警備員が朝まで入り口に駐めた車の中で待機したようだ。

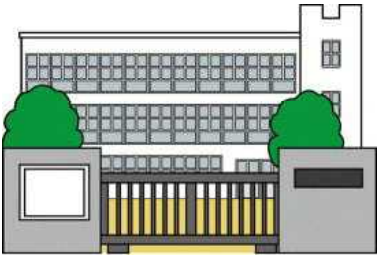
「センサーの感度をあげすぎていたようです」

後から受けた報告である。その後、感度異常は一度も起こっていない。

戸締まりはいままで通りである。相変わらず管理職が、半時間かけて、ぐるぐる校舎を回っている。

退職した私は、近くを通る度に、トイレの窓を外から見上げている。

「閉まっているかいな？」



clipart by illpop.com
画像：イラストポップ

あとのまつり

学校の校長というのは、全校集会で児童や生徒に表彰状を渡す。中学校では教科別の活動や、ブラスバンド・野球・サッカー・美術などクラブが多くある。しかも剣道などでわかるように、団体に対してだけでなく、個人にも「市内大会男子第三位」などと表彰状があるから、その数は大変なものになる。

私は、その日、体育館で六百人ほどの生徒の前に立ち、次々に賞状を渡していた。

床に膝を抱えて座る生徒がいる。体育座りというスタイルは、結構しんどいものだ。その生徒の列の後ろには、ずらりと先生方が壁際にいる。

時折、生徒が話をしたり、座り方が乱れると、先生が列の間に入っていって注意をする。

私は「はい、おめでとう」と、目の前の生徒に賞状を渡し、その生徒が礼をして段を下りると、横手にいる生徒会担当の先生から次の賞状を受け取る。そして次の生徒があがってくるのを目の端に捉えながら、さっと文章に目を通し、あがり終えた生徒と挨拶の礼をした。

「賞状」と読み始める。「優勝」とか「最優秀賞」「男子個人第何位」という文字があり、その後、団体や個人の名前が続く。

生徒の名前がわからない場合は、目の前のマイクを避けて顔を突きだし、生徒に尋ねる。いつも相当量の賞状がある。その中には、姓にも読み方のわからないものがあるし、名前となると実に個性豊かだ。

赴任早々の校長である私には、難問奇問の連続となっている。

「央子」「教洋」「迪子」「大翔」「陽菜」。最近は、難しい漢字や個性的な読みを与えるものが増えてきた。

それぞれ「えいこ」「のりひろ」「みちこ」「ひろと」「ひな」と一応読む。一応というのは、例えば「陽菜」は「ひな」だけでなく「はるな」とか「ほのか」とかいう読みを与える場合があるからだ。

だから、賞状を読むのを中断して尋ねても、学校ではそれは不思議な光景ではなく、当たり前の風景になっている。

団体名や個人名を読み終えると、『あなたは、第何回何々大会において…』と続きを読み始めた。同時に、私の目は文章を先読みしてゆく。

その日、読みつつ先に目を走らせていた私の心臓が音を立てた。最後に、賞状の授与者の名前があるのだ。団体の場合もあるし個人の場合もあった。普通この文字が読めない場合は、「たぶん何々と読むのでしょう」とか、「目の前の生徒」に聞いたり、担当の先生に尋ねたりする。

「何々です」と、体育館の後ろから担当の先生が大声をだされる場合もある。

しかし、その賞状の授与者は、私の知っている男の方であった。昔、同じ中学に勤めていた先輩で、退職されてある団体の代表になられていたのだ。

氏名は「何々節」だ。

もう二十年以上も前のことである。よく話される方で、その独特の話し方が評判であった。

職員室で「今日は、何々ぶしが好調だったな」といつも話題にのぼっていた。

つまり、『節』という名前の漢字を、『歌の節』と引っかけて、使っていたのである。のみならず、仲間内では「何々ぶしは出張やで」という風に、親愛の情を込めつつなのだが、呼び捨てでいうようにもなっていた。

失礼ながら私は、この先生をよく存じ上げない。何年かご一緒したのだが、教科も異なれば、学年も違い、年齢も相当違っていた。当時の勤務校は大規模校で、先生も五十名以上はいただろうか。

（ぶし、という読み方はおかしいぞ）

と、頭の片隅で警報が鳴った。女性ならば「節」を「せつ」と読むかも知れない。また、この場合読み方がもう一つあった気がしたのだが、男性には該当しないと思いこんだ私の貧弱な頭脳は、その読みを拒否していた。落ち着いて考えれば、そうかと思い至ったかも知れない。

賞状の残りは年月日と団体名とその方の名前だけである。

一瞬頭が熱くなり、賞状を持つ肩に力が入った。

（ええい！　やむえない！　いくぞ！）

と、私は年月日に続いて「会長」といい、一呼吸置いて「何々ぶし」と幾分力の入った言葉をはきだした。

もちろん生徒は、団体の会長名の読み方など知ってはいない。反応はない。けれど、後ろにおられるそのクラブ担当や、年配の先生の中にはご存じの方もいるのだ。

声を殺して笑い転げておられる。

私は「しまった！」と、心の中に冷や汗を流しつつ、知らぬ顔で、次の賞状に進んだ。

しかし、案の定、先生の懇親会の席では、今年の大傑作にあがった。

「この会長さんの名前はどうお読みすればいいのでしたか？」

と聞いておれば、ひょっとして生徒の中から、あるいは先生の中からはもちろん、教えてもらえたのだろう。

数秒の勝負で、「読まなければ」と焦ってしまったこと、昔から耳に響いていた思いこみが「おかしいぞ」という頭の中の警報を無視したこと、ついつい、校長が詰まってはまずい、という体面が働いたことなどが大傑作の原因だと思う。

因みに、「節」は、「みさお」と読む。

おかしいと思えば、わからなければ尋ねることが大切だ。「聞くは一時の恥聞かぬは一生の恥」という。

しかし、こういった儀式の場では、しかも壇上などではなかなか聞くことはかなわない。そのためには事前の準備もまた大切である。

この一件以来、私は早い目に体育館に行き、生徒会の生徒に「これは、どう読むの」と聞いて、賞状に鉛筆で薄く、ふりがなを振ることにした。

生徒会のみんなは、最初は怪訝そうに、そして次第に目を輝かせて教えてくれた。

なにせ、いつもはあまり言葉を交わすこともなく、校長室にいるか、壇上で挨拶する姿だけの先生である。

毎朝の校門での立ち番や、放課後遅くの巡回で出逢っても、挨拶するのが関の山の存在だ。私がだす学校だよりに載っている童話は読んでも、感想さえ担任を通じて間接的に伝えるだけだ。

その校長先生を目の前にして、しかも漢字の読み方を教えるのである。

「そうか、そういえば・・・」

教師時代から、私はテレビゲームにはまっていた。

脱線するが、退職して還暦を過ぎたといういまでも、パソコンやインターネットは大好きである。パソコンのゲームも時々やる。ＲＰＧ(ロールプレイングゲーム)で、イースや、ザナドゥ。ＰＳ２で、ファイナルファンタジーも遊んだし、一九八六年に出たドラクエのファンでもある。

当時は家庭用の初代ファミコンが大流行であった。しかし、四十歳前後にもなると、コントローラーの操作はヘタであるし、記憶力も衰えてくる。で、学校で休み時間になると、よく生徒に「おい、あそこから次へはどうしていくんだ、教えてくれよ」と尋ねたものである。

そのときも生徒たちの顔は輝いていた。

わざわざ、図を書いてきてくれたり、持ってきてはいけない攻略本を、紙袋に入れてそっと貸してくれたりした。

私は「むむっ！」と唸ってウインクし、「感謝！」というや、さっと袋を職員室の引きだしに入れたものだ。それの是非を論ずるつもりはない。

しかし、たかがゲームかも知れないが、先生に教えるというのは、子どもたちにとって、もの凄く楽しく、嬉しいことだったのだろう。

そういう行動をとったからといって、生徒は先生をバカにしたりはしない。

ゲームだけではなくて、教科の授業でも「へえーっ？　それは先生知らないなあ、教えてくれよ」とよくやったものである。

ところが歳をとるにつれて、私はこういう態度を忘れてゆく。

学校現場から県教委の指導主事になり、主任という肩書きがついた。ついで市教委から出向した市役所の課長となり、いわゆる出世をしていった。

もちろん、「教えてよ」という態度がなくなったわけではないのだが、次第に、「知った顔をする」ことが多くなっていった気がする。

知った顔は、限界のある顔だ。

知った顔は、無惨な顔である。

知った顔は、夢のない顔である。

いま、七十歳になろうと、八十歳まで生きていようと、素直に教えてもらうことを続けていきたいと、我が身を反省し、考えている。

「言葉だけでないぞ、態度も心もだ。教え、教えてもらうという相互作用が、親が子に、先生が生徒に、社長が社員にのぞみ、のぞまれる教育と学習の原点なんだ」

校長職を辞して、いまごろ気がつき、ため息ばかりの日々が続いている。

◆神戸新聞文芸入選作　平成十九年二月五日（月）神戸新聞朝刊掲載　［二〇〇七年］

あとのまつり選評抜粋

「もと中学校長の述懐が、ほころびのない平明な筆致で書かれ、なるほどと頷かされる。壇上で生徒たちに表彰状を渡す折の苦労、また生徒にこっそりゲームを教えてもらうことの相互作用も伝え、よろしき一編とした」

［島京子選］

・文庫『一本 50000円 天然知能水』
風詠社発行　石川希理著
※書店・アマゾン他インターネット書店でご注文下さい。700円

※自選児童文学集

校長のおしごと

メモを書いて手に持ち、校長室を出る。

授業時間中の職員室は数名の先生がいるのみで静かである。

一年生の学年集団の席は校長室から一番遠い位置にある。窓際の本や書類があふれかえった机の端に、セロテープで留める。

『E先生。お手数ですが、休み時間においでください。石川』と書いてある。

国語科のE先生に声をかける機会はなかなかない。

朝の職員会は、私の方がたいてい開会ギリギリまで立ち番に出ている。職員会が終わると学年会に移行する。学級担任の先生は、その後、朝の短学活（短い学級活動・ショートホームルーム）に向かう。欠席確認や、連絡事項、配布物などで慌ただしい。

職員室に帰って、欠席者の保護者からの連絡があるかどうかを確認し、連絡がなければ担任から電話する。

学年の黒板に学級の欠席者などを記入し、回収したプリントなどをとりあえず保管する。

すぐに一校時の授業がある場合が多いので、ゆっくりしている時間はない。

この時間、私はたいてい一階をウロウロしている。遅刻する生徒指導に立ち会ったり、保健室や特別支援教室を覗いたりする。

授業が始まると、とりあえず私はヒマになる。これを『ボウカ（忙暇）時間』と自分で名付けた。忙しいが暇な妙な時間である。

校長の仕事は、学校教育法第28条3項にこうあるだけだ。

『校長は、校務をつかさどり、所属職員を監督する』

退職後三年、随筆を書くのに何の資料も見ずにこの法律の文面が出てくる。簡単だが重い文章である。

校務は当該学校の教育、人事・施設管理活動のすべてである。恐ろしく幅が広い。その校長の教育権などを受けて、先生方は仕事を行うという仕組みになっている。

オールマイティだから、やろうと思えば、一応何でもできることになっている。一応というのは建前はそうだが、実際はできないということだ。教育は人と人との人間的触れあいで営まれるから、命令や規則に馴染まない部分が多い。

だが、校長自らのことになると簡単だ。例えば出張だが、『自分で自分に出張命令』をだすことができる。各教科の研究集会、教育講演会、教育各部門との打合せ、ＰＴＡの講演会など、仕事関連なら何でも出かけられる。極端にいえば、演奏会や文化講演会などでも仕事として出かけられないことはない。誰の許諾もいらないから、毎日、学校にいないという校長も出現する。

市役所の課長も経験した。課長も管理職である。だが、毎日課にいないということは出来ない。最高責任者で係長や部下からの相談が多い。決済も多ければ、来客や他課・他部局との会議も多い。また部長という上司もいる。従って毎日定時に出て定時に退勤する。退勤が定時なのは、課長がいると部下がなかなか「お先に失礼」とはいかないので、課長職以上は故意に定時退勤をすることが多い。出張の場合は部下が用務や車の手配をして同伴する。

学校の場合、教頭は現場上がりが多く週一時間ほど授業も持つ。行政経験がないと事務の経験や上下関係意識も少ない。実際上管理職という立場は薄い。実際上管理職は校長独りである。部下がゼロの管理職である。つまり行政や会社などとまったく組織が異なるので、校長は名誉職のような

位置づけになる。中学の場合、学年毎にシステムが動き、物事が進んでいく。決済もほとんどなく、校長の判断が必要な場面は極めて少ない。出張も準備も用務も校長一人の場合が多く、全くの自由になる。

私はその日、パソコンを開いて『学校だより』を打ちだした。これは校長個人が作っているＢ４一枚の保護者と全校生へのたよりである。週一回の発行でもう12号になる。

「学校だより、だすよ」

Ｑ先生が大きなお腹を揺すりつつニヤリとしたのを想いだす。歴代の校長でたよりをだした人はいるが、よくてせいぜい数号だそうだ。しかし、私は書くのは苦痛ではない。奉職して以来、『学級だより』を毎年だし続けていた。この中学に赴任してからは先生方向けに『職員室だより』も年度途中からだしだした。

これを書かないときは、校舎内をウロウロとすることもある。授業に入って参観したいが、そこまですると先生方の緊張を招いてしまうだろう。「授業見てええか」と尋ねると「いいですよ」とみなさん答えてくれる。だが、そうすると感想も述べねばならず、こちらも心構えがいる。

忙暇（ぼうか）時間は案外多くない。

地域の方々、ＰＴＡ関係、市会議員、教育関係者などのお客様が多い。ほとんどは校長がいなくても、顔出しして帰られる方ではある。ただモンスターエリアマンへの対応もある。いわゆるモンスターペアレンツ（怪物保護者）の地域版である。地域社会が崩壊して、何でも学校に持ち込まれる。その学校も教師も、いい意味での権威が著しく低下している。「校長を出せ」といわれる。教頭ではダメである。校長にいったということで納得される場合が多い。「教委にいうぞ」というのは、校長でとめられない場合が多い。もっとも最近は小・中学生が先生に向かって「教委に言うぞ」と宣わく。教委はこの手

の苦情で、日中は仕事にならないことが多い。これもたいてい「教委にいってやった」で気が済むらしい。残念なことだが地域社会が崩壊し、そして学校への信頼も失われている。また学校も制度疲労を起こしている。例えばほとんどの先生方は真面目で熱心だが、中には簡単に子どもに手を上げたり、授業がわかりにくかったりする方もいる。しかし学校には人を入れ替えたり、授業から外したりする余裕は無い。大切な要員である。ほとんど何の手も打てない。

校長の用務には、そういったこと以外に少ないにしても教職員からの報告・連絡・相談がある。企画・総務といった委員会などは、該当する先生方の空き時間を何曜日の何時間目と決めて行う。主なものは校長も出席する。

だから、本来、自由に教職員や生徒と触れあえる忙暇（ぼうか）時間は削られ続ける。

その教育の根幹である人との触れあい時間を最も少なくしているのは公的出張である。前述したような無理な出張をしなくても、出る機会は多い。情報交換に必要不可欠の月一回の校長会、月一回の校区校園長会はやむ得ない。また、関連する高校・小学校・幼稚園などの大きな行事にも出る。さらには地域の連合自治会などにも出席する。祭やパトロールもある。一度など、夏祭りの櫓の上で『演歌』を歌わされたことがあった。もっとも私は歌うのは嫌いな方ではない。

脱線した。そして、生徒指導関係の出張もある。警察・補導センター・児童相談所・裁判所・鑑別所…。

※

一校時の休み時間に、E先生が校長室に現れた。二校時は空き時間だという。

「どうぞ」

パソコンのキーボードを閉めて立ち上がった。D中の校長室は狭い。指導要録などの保管キャビネ

ット、私の机と椅子。そして三人がけのソファーが4つにローテーブルが二つ。ここで会議をするのだ。会議室はあるが、校長室は職員室に隣接し何かと便利である。お茶はすぐ飲める。書類も持ってこられる。会議室に電話はないのでここなら電話にも対応できる。冷暖房もある。とくに、やって来た子どもに対応しやすい。

だが、このソファーが校長室を占拠していることも事実なのだ。

そのソファーにE先生が座る。D中の国語科の主任で、図書館担当でもある。一年生の学級担任をしている。また全校の女性教諭の中で四十歳代の中堅。学校の若手を引っ張る一人である。後日、大掃除のとき、このE先生が裸足になってしゃがみ込み、生徒と床のワックスがけをしていたのを覚えている。

だが、私は赴任以来、ほとんど話したことはない。どうしても進路や行動で問題が多い三年生担当の先生方との話が多くなる。

それに、校長室からもっとも離れていて、話す機会も作りにくい。

私は、ゆっくりと口を開いた。

「実は、国語科と図書館担当になりまして」

E先生は予想していたように頷きつつ、唇を引き締めている。

「それで…」

私は心の中で『難儀ななあ』と呻きつつ話を続ける。

私が国語科と図書館担当というのは、校長会での決定なのだ。

いうまでもなく中学校には「英数国社理」の五教科、「美・音・技家・保体」の四教科、合わせて九科目がある。それぞれ免許を持った先生がいて、専門教科として生徒に教えている。

学校規模にもよるが、それぞれの教科には複数の教師がいて、教科部会を作っている。ここで授業の

割り振り・進度調整をしたり、研究をしたりする。

この教科の研究会は、勤務している市全体の研究会につながり、それはさらに大きな地域、県、近畿、全国に拡がっていく。

勤務している市には十三の中学があり、すべての国語教師で作る国語教育の研究会もある。

この市の研究会には会長が置かれるが、それが私なのだ。一般の先生の中で選んでもよさそうだが、校長会の中で互選する。

会長になると、市の国語教育担当者会、研修会を開催しないといけない。地域や県の、ときには近畿や全国の、役員になったり研究大会にも出なければいけない。

こういった組織は九教科だけでなく、他にもある。図書館、生徒指導、人権、道徳同和、生徒会、特別支援、養護…。また、各クラブにも全国につながる組織がある。

とても授業や学級を抱える一般の先生が担えるはずがない。

校長会でどの校長が、何を担当するかは大体決まっている。自分の専門教科がまず始めだ。それから関連するもの、得意なものを担当する。

だが、私の専門教科である『社会科』は、既に担当校長がおられる。国語の専門者がいない。それで私に回ってきた。

これは少々難儀である。社会科ならば二十年近くやってきた。社会科部会で知り合った方も大勢いるし、研修会の内容も掴める。

しかし国語となると、同じ学年に在籍して知り合った方以外はあまり存じ上げない。もちろん内容はわからない。また、国語は通常主要五教科といわれる中でも、基礎となる言語を学ぶ学問である。国語力がなければ、英語も数学も、理科も社会も理解できない。つまり、国語は文化力の源泉なのだ。もう一つの担当である図書館も、『人類の文化遺産の宝庫』であり情報センターである。

「弱った…」

その弱った気持ちが、E先生に響いているらしい。既に覚悟されているようだが綺麗な先生の表情が厳しい。なにせ国語科の主任が、実務を担わなければならなくなる。なんとか了解いただいた。実際上は引き受けざるを得ないのである。校長会での担当の決定の仕方も、そのあとの学校の体制も誰も吟味せず、改革もされていない。戦後出来あがった教育制度はこんな所でも完全に疲労を起こしていて、既得権を握った者を守るようになってしまっている。

ただ、このケースでは研修会のお膳立てなどは、私の経験が役立つことになった。教委などでイベントは全県的なものさえ担当してきたのである。私は、忙暇時間に作ったプリント類や、タックシールを持ちだした。また幸いなことに、昔、他の中学で同僚であったH先生が他校におられて協力してくださった。

実は、こういった仕事は国語だけではない。私の場合でいうと、「図書館」「生徒会」「修学旅行」「人権道徳」などが入ってきた。忙暇は実は「忙忙」なのだ。

二〇〇八年からは、『校長ー副校長ー教頭ー主幹教諭ー指導教諭ー教諭』という形が見られだす。といってもまだ形だけであるようだ。教育という部分では教師の自主性は尊重されねばならないが、ニュースなどで見る欧米先進国と比べると、やはり歪である。

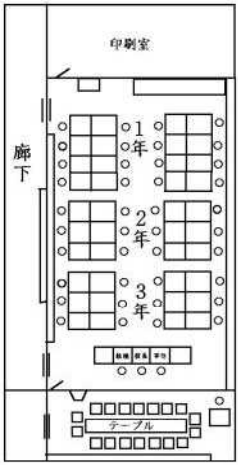
二〇一四年でも、この新しい仕組みはうまく動いていないらしい。名前があるだけだ。一つには、行政や企業の課長、係長などは、はっきりと仕事として部下の管理監督をする。しかし学校では主幹といっても部下はなく、その仕事のために授業量などが減るわけではない。また各先生の専門には口出しできない。おまけに生徒との人間関係のうまいへ

タは、経験や年齢とは関係ない。手当はコーヒー代程度である。小学校では二、三人の職員で一学年というところもあって職階は機能しない。もちろん一学年が十名以上にもなる中学では職階が必要なのだが、先生がなりたがらない。一般的な組織に属した経験がない。みんなで自由に会議して適宜分担するという一種の共産的集団だからである。それは逆にいうと評価という荒波からも逃避させてくれる。もう一つは、管理教育という名での押しつけへの警戒である。いまでは小中ではほとんど見られないと思うが、国歌に起立しない先生もかつてはいた。確かにずるずると思想が統制されてはかなわない。しかし第二次大戦の悲惨さを繰り返さないために『羮に懲りて膾を吹く』のでは、我が国はこれから成り立たないのではないか。

また私も昔、組合の分会長などもしたが、組合幹部の「労働貴族化」が進み、その既得権擁護のために、建前としての「管理教育反対」が叫ばれているのは、残念なことである。

◆校長室･職員室

校長室は中学校の教室の半分の大きさである。次図の一番下。学校によって差はあるが大体このようなものだ。



真ん中にテーブルがあってソファーが並ぶ。学年会議、教科部会、企画委員会、総務委員会。それに保護者を呼ぶような生徒指導が行われる。もちろん来賓室でもある。

学籍簿等も置かれていて、まあ右端の校長の席以外は空間がない。退職後、大学で研究室をいただいたが、そのゆったりさに感激した。

職員室は教室二つから三つ以上の広さがある。しかしそこに四十名ほどの先生の机と椅子。壁際に低いロッカー。もちろん用務員席、簡易な流し、冷蔵庫、食器棚。おまけに中学ではクラブ用の備品なども置いてあり、校長室と同じように椅子を動かさないとうまく歩けない。

学校は生徒も来校者も職員室に来るから、ここが学校という生き物の心臓部である。会議室も空き教室に作ってあるが離れていると何かと不便である。で、十数名までの会議や打合せは校長室が使われる。

石川希理著

・『エスプラネード』短編小説集

コシーナ文庫　アマゾンで発売中　６９８円

・文庫『一本　５００００円　天然知能水』

自選児童文学集　風詠社発行　７００円

書店・アマゾンなどネット書店でどうぞ

校長の名前で出ています

中学校長のいる場所は校長室である。たいてい開け放たれたドアを通して職員室とつながっている構造になっている。

職員室には校長室から入ってすぐの所に、黒板があり、その日の学校の情報が書き込まれている。当日の予定、出張者名と出張先、年休取得者。各学年のクラス数や生徒数も書いてある。黒板を書くのは教頭の仕事だが、不在や出張も多いので、そのときは校長が記入する。

私は亥年の生まれのせいではないが『猪突猛進型』だ。だが、突進するまでは『ウジウジと考え』『あれこれ心配する神経質』な性格である。

だから、黒板を書くのは好きである。『ウジ・神経』だから、きちんと情報を伝えようとする。『漏れがあってはいけない』と、完璧な記入などできるはずもないのに、頑張って書こうとする。

まず黒板を綺麗に水拭きして、丁寧に記入する。

そこに書かれた文字は、一つの命令となるから、管理職の権限行使としての醍醐味もあるのかも知れない。

例えば『戸締まりに注意』と書けば、全学年の先生方が下校に際して、窓やドアの施錠に気をつけることになる。

四十人ほども教職員がいるが、彼ら全体への連絡は朝の僅かな時間の職員会を利用するしかない。緊急の場合は臨時の職員会を開いたり、学年を通して連絡したりできるが、あとは不可能である。

体育の先生は授業が連続していれば、体育館に行ってしまって、下校時まで職員室に帰ってこない場合がある。理科の先生は理科室で実験準備に追われる、という具合になる。

しかし、下校前には、生徒への連絡事項を掴む必要があるから職員室には必ず顔をだす。そのときに、学年の黒板や、職員室の前にある全校黒板を見ることになる。

だから、黒板はある意味、情報センターであり学校経営の要ともいえる。

いうまでもなく学校職員の上下関係は、世間の指揮命令という意味合いが薄い。『教育は人と人との関係・触れあい』が根幹だから、命令は馴染みにくい。

軍隊や会社や役所でも、程度の差はあれ人間関係を無視した『命令・上下関係』は成立しないだろうが、公立中学校には命令そのものがほとんどないといっていい。

話し合いとお願い、が学校経営の基本なのだ。

私が経験した役所の課長時代のやり方は、学校現場にかえるときにすべて捨ててきていた。

黒板を書き終えると、手を洗って、職員室の前に一列に並ぶ事務机の、真ん中の椅子に座る。

右に事務職員用の机があり、パソコンと出勤・出張簿、よく使う書類、鍵などがそろっている。事務員は事務室があるので顔を見せるのは朝だけだ。

左に教頭用の机があり、ここにもパソコンがある。

この間に校長用の机がある。

あまり使用しない。私は教頭不在時などはここにパソコンを運んできて仕事をしていた方だが、普段は空いている。

ただ、職員会のときは、真ん中の校長の位置が全体の要になる。

学年だよりや、生徒会通信、職員が校長に見せねばならない書類や、配布物があるときは、この机に置かれている。一般社会では、課員・主査・係長・課長という稟議(決済)が必要だが、学校ではまず行われない。

協議を要するものなどは、担当の先生が校長室に持ってくる。

ある重大行事の前日。
私は、校長室を出て、職員室に入った。
部屋はガランとしている。
教頭も事務職もいないし、用務員は外で作業中らしい。各学年の所に、一人か二人、授業のない先生方がいるだけだ。
校長用の机の椅子に腰掛け、配られた書類の整理にかかる。
たよりなどは目を通して、ファイリングする。
「ん？」
目が点になった。
Ｂ５のわら半紙、右上に『校長　石川希理』の文字がある。
因みに、会社や役所などでは、もう一昔前から国際規格のＡ４という用紙が普通使われる。
だが、学校では国内規格のＢ版、それも懐かしいわら半紙が大手を振っている。試験や通信などにはＢ４、お知らせなどにはＢ５版が使われる。キャンパスノートの大きさである。
そのわら半紙に、活字が踊る。
『ご案内』とあって、右肩の日付は今日である。
宛先は『三年保護者様』とあるから、明日の行事の案内が、前日の今日配られているわけだ。
発送者は三年職員一同と校長の私である。
「これ…」
といいかけて、顔をあげたが、周りには誰もいない。三年の臨時採用の先生が一人いるだけだ。
いくらなんでも、明日行われる行事の案内が前日に出るとはひどすぎる。来賓への案内はひと月以上前に発送されているから、当然そのときに出ているものと思っていた。
しかし、確認しなかった私のミスである。
三年生の保護者は、知っていて当たり前の行事である。だから、案内などなくてもいいともいえるけれども、重大な学校行事である。
こういったミスの場合は、文末に、お詫びを載せ

るのが普通だが、それもない。
校長の私の名前で出ているわけだから、なんといつても私の不始末になる。知らなかったではすまない。といって、明日は行事の当日で、しかも議員や教育委員会からも来賓の来る全校規模の重要なものだ。口頭にしろ、もうお詫びする機会はない。まさか当日の式の中でそれをいうこともできない。
私は唸った。
課長時代であるならば、課の対外文書はすべて私の決済が必要である。
課員時代は、係長や課長に書き直しを命じられることは度々であったし、課長になってからは逆に点検に回った。
一つの事業は、決済によって、共通認識され、もれなく進んでいく。ステップバイステップである。
普通、特定の個人に案内状をだし忘れた、漏れたということはあっても、案内状自体をだし忘れることはまずない。
「それが、このありさまか…」
学校に於けるこの行事は、各種行事の中で最も大切なことである。
私は苦笑いしつつ、案内文を持って立ち上がり、校長室に戻った。
行政現場から学校に戻るときに覚悟していたことである。
四十人ほども職員がいて、学校現場を離れたことのあるのは、私一人である。私の場合、若いときに民間経験もあるが、そういった経験を持った先生もまたほとんどいない。
『世間の常識』は『学校の非常識』に転化する。
「しかしなあ…、いくら学校といっても人の名前を勝手に使って、送り忘れた文書をだすか…」
とは思う。少なくとも忘れていれば、それを詫び、そのままだすか、お詫び文を入れるかを相談するのが普通の感覚だろう。
私の赴任した中学は、わりあい校長に事前に書

類を見せるところなのだ。「校長先生、これだします」と校長室まで持ってこられる先生方も多い。しかしそれができない人も多い。というより、組織というもの、職業人というものがわかっていないのである。

先生は生徒と保護者の関係が最も大切である。だから授業がうまく、生徒に人気があり、保護者の支持のある人は、それを自分の教育的力量だけでなく事務処理能力などと思ってしまう。そしてそれがすべてであると錯覚する。

だがしかし、学校教育は集団教育なのだ。四十人の生徒がいて、全員が担任を熱烈に愛しているということはあり得ない。「金八先生」は存在しない。俳優の武田鉄矢自身がそう述べている。

温和しい子ども、見過ごした子ども、その先生が嫌いではないが性格の合わない子ども、そういう子どもたちは、他の先生や、職員集団の見えないフォローや、学年・学校全体の包容力、動きによって教育されていく。同時に地域や家庭の力も衰えたと指摘されつつも大きいのである。

そこには先生の組織があり、指導関係があり、学校と地域のよい関係があり、家庭の信頼がある。

つまり、個人対個人の人間関係こそが教育の根幹でありつつ、学校も先生もまた世間の教育力や常識の上に存在しているわけである。

中には極めて個性的な指導をするために、それに合う先生や生徒や親のみが取り巻きを作り、その中で満足し、周りが全く見えなくなる先生も出てくる。悪い意味で使われる唯我独尊である。

「先生やもの、学校やもの、仕方ないわよ。会社の創立祝いの案内文書が前日に配られてみなさいよ」

「子どもが人質に取られているからね」

「黙って、関わりにならない方がよいわよ」

という世間の裏の声が聞こえない。

「事務処理なんか、教育と関係ない」という意見ま

でもある。それに追われる環境はよくないにしても、人の組織できちんとした事務処理ができなくては組織は動かないし、それがわからなくては教育者とはいえない。

「先生は裸の王様か…、しかしまあ、演説をぶつわけにもいかず、注意すれば、細かいことをいって、に、なるだろうし…」

私は、ため息をつきつつプリントをファイルに綴じ込んだ。

授業終わりのチャイムが響く。

この行事の後、二週間で私は退職する。いまさら「あとのまつり」である。

もう一度、大きなため息を吐いたとき、職員室からよく響く声が聞こえてきた。

「だし忘れとった」

明らかにプリントをだした男性だ。誰かに指摘されたらしい。幾分恥ずかしさを含んだ声。

（心に悔いがあるのは救いか…）少しホッとしつつ、私はファイルを引きだしの奥にしまい込んだ。

考えてみると、文章を書くことが苦手な教師がいる。私が初任者の時、勤務先では若手の間でガリ版刷りの「学級通信」が流行していた。私もよく出したが、年配の女性教師から「書いたら証拠に残るからやめたら」といわれたことがある。実はその女性教師、受け持ちの子どもや親から「先生も出して欲しい」といわれ続けて苦々しかったのである。

書けなければ、個別面談をするとか別のことをすればいいのだが、別のことも困難だった。

学校を出ていても文章を書くというのは別の能力らしい。ましてビジネス文書などは見たこともない方が多い。確かに教育現場は人間力がものをいうが、組織である以上、スケジュール管理や文書の作成と決済（稟議）の基本くらいは必要と思うのだが。

洪水

中学校の二階に位置する職員室にテレビの音だけが響いていた。東に面する職員室の窓ガラスを雨粒が叩き、風が鳴り続けている。

窓からは、河口近くの川の水面が、黒いさび色で踊っているのが見える。堤防の上までほんの一メートルほどとしか考えられない高さである。

「あふれるかもしれんなあ」

私はそう思いつつ、壁の時計を見た。午後三時十分。外には、黒い雲に覆われた夕暮れのような空が拡がっていた。

「先生、もう帰ってや」と教頭先生を送り、一階の出入り口を閉ざしてから十五分。けれど、もうずいぶん長く一人でいる気がする。

二〇〇四年、平成十六年十月二十日、台風23号が近づいていた。後日の報道によると、兵庫県では豊岡市の水没をはじめ死者二十六人という大災害が起きた。地球温暖化の影響もあるのだろうか、近年まれに見る超大型台風だった。全国の死者は九十六名に達した。舞鶴市では由良川が氾濫し、観光バスが水没。バスの屋根に脱出した人の救出がテレビで映された。

この日、勤務先のD中学校では、早朝から慌ただしい動きが続いた。

校長の私は、いつもは七時半には校門に立って挨拶運動をし始める。しかし警報が出そうなので、この日の朝は六時半過ぎには校長室にいた。中学校は七時の時点で警報が出ていれば、生徒は自宅待機になる。

「出ました」

生徒指導のR先生が、顔を覗かせた。

私は立ち上がって、校長室を出て職員室を覗くと、「休校やな」といった。既に出勤している十名ほどの先生方が頷く。

まず午前中に警報が解除されるとは考えられない状況である。教育委員会などと連絡を取ってから、傘を掴んで一階に降り表に出た。

学校は河口近くにある。校門前の護岸堤道路にあがると、南に海が望める。そういう位置だけに、雨風も強く濁流となった川のうねりも目の前に迫ってくる。

「休みやぞ。気をつけて帰れ！」

一緒に出てきたR先生が、フラフラと現れでた生徒に声をかけている。

私は、そのまま学校の周囲をぐるりと回った。学校も周辺の住宅地も、もしも川が氾濫すれば大変なことになる。

西門から校内に入ると、西校舎そして北校舎沿いに進む。端には武道場があり、ここは災害時の避難場所である。入り口前のキュービクルという高圧受電設備の手前を右折して、再び校門に出た。

八時過ぎからの職員会では、校舎内外の点検を指示した。

「終わりましたら、報告されて、あとは適宜下校してください。一応、十二時をメドにしておきます」

教頭の言葉を確認しつつ聞いた。職員の帰宅の交通手段も奪われる可能性がある。

それから、私は事務職のWさんと一緒に南の校庭に出た。

「校長先生、あれ」

グランドのサッカーゴールなどは、横向きに倒してある。しかし、国旗掲揚台のロープがたれ下がったり、防球ネットの補強鉄筋が緩んだりして音をたてている。私はWさんと始末してゆく。

全員が点検を終え、必要な生徒への家庭連絡、学年毎の会議などもすんだ。風雨が少しずつ強くなり、どうやら確実に暴風圏からは逃れられないようである。

昼を境に若い独身の先生方が少し残るだけになり、事務のWさんも、用務員さんも帰宅した。そ

の後、全員の下校を確認すると、私は一人学校に残った。

日常は生徒の息づかいであふれる校舎。先生の会話や、たてる物音で賑やかな広い職員室。それだけに却って沈黙が強調される。

「少し横になっておくか…」

私は、ガランとした職員室から、校長室に移った。

テレビをつけて、ソファーに寝ころぶ。

外はもう夜のように暗い。

風と雨が窓ガラスをたたき割るようにぶつかっている。

目を閉じたその瞬間に、職員室で、電話が鳴った。

「やれやれ」と呟いた気がする。

取り上げた受話器の向こうから、地域の高齢者クラブの代表Eさんの声が響いた。

「ああ、校長先生。避難したいんやけれど」

私の頭の中で、避難という言葉が唐突に暴れ回った。

なるほど、川の濁流は、いまにも堤防をこえそうだ。もうEさんたちは家を出かかっているという。とりあえず、柔剣道場の武道館を開放しなければならない。

畳が敷いてあるし、トイレもある。

私は鍵を掴むと、一階の出入り口から校門に出た。

目の前には少し高くなって堤防沿いの道が黒々とあり、そこから雨水が滝のよう流れ込んできている。運動靴はたちまち水没し、傘はほとんど使えない。

校門を開けると、その足で武道館に向かう。扉を開けて灯りをつける。再び外に出て、幅三メートルほどの、構内アスファルト道路を挟んで隣接する北校舎の一階扉を開けた。これで武道館入り口から、一旦建物の外には出るが、北校舎に入り、その

ま二階の職員室に直行できる。
そこに、Eさんを先頭に四人の方が現れた。全員七、八十代の方で、まだ来られるようである。
「校長先生、すみません」
「とりあえず、中へどうぞ」
私の頭の中ではいろんなことが渦を巻いていた。
避難者の人数、氏名などの確認。市教委か対策本部への連絡。湯茶の準備。救急箱とラジオ、毛布。
職員室へとって返すと、電話が鳴った。
「校長先生大丈夫ですか？」生徒指導のR先生である。「ゆきましょうか？」
「先生ありがとう、助かる」
一人では無理と考えていたところだ。
受話器を置くと、また電話が鳴った。
今度は近くにあるコミュニティセンターの所長D先生であった。
「避難勧告でとるで」
D先生によると、午後三時半に、川が警戒水位の二メートル四十センチを突破したそうである。広報車が回り、安全な近くの小学校に市のバスが、住民をピストン輸送するという。
私はお礼をいうと同時に手短に状況を伝え避難者がいるので、こちらにもバスを回してもらえるようにお願いした。
電話を切ると、とりあえず市の本部と市教委に伝える。それから再び武道館に向った。
九人に増えた高齢者の方々を見ながら、Eさんは困惑した目を向けられた。
「校長先生、もう動きたないんや」
私は雨に濡れた髪の毛をかき上げた。
身体の不自由な方もおられ、ようやく辿り着いたのである。それをまた校門に向かい、バスに乗り込んでというのは確かに大変だ。この風雨の中を再び避難し直すことを、私はそれ以上口にだせない。
鉄筋四階建ての中学校だから、水がもし押し寄

せても、二、三階に避難すれば命に別状はない。しかし、孤立するのは間違いないだろう。

再度職員室に戻ると、R先生が現れた。

私はホッとして、ラジオや備品の確認と、武道館の様子の把握を頼んだ。

それから、市の本部に、避難者の言葉を伝えた。

「わかりました。そしたら校長先生、水がもし出ましたらすぐに、二階にあげてください」

私は頷きつつ電話を切り、「はて、どこに来てもらうか？」と腕組みした。

校舎の二階より上に適当な場所はない。空間としては教室を転用した会議室が最適である。しかし、連絡しにくく何の設備もない。十人前後なら校長室か職員室だな、と考えた。飲み水に食料さえ少しある。テレビもあるし、校内放送もできる。学校の司令部は職員室なのだ。

そうしようと決めたときに、顔見知りのG先生が来られた。近くに住んでおられる。有り難いことである。

「教頭先生にも連絡してもらえますか」

そう、お願いして、私は武道館に向かう。

川の水は川幅いっぱいに、黒く鈍く光りながら流れている。

記録によると五時五十分、水位は三メートル五十八センチに達したそうだ。

しかし、幸いなことに、まるで嘘のようにフッと雨はやみ、劇的に水位は低下しはじめた。短い川なので、増えるのも減るのも急である。

七時十分、市内初の避難勧告は解除された。

避難されていた方々が帰宅され、戸締まりをしながら、私は、ぼんやりと考えていた。

学校は避難場所だが、豪雨や津波となると勤務先校は却って危険だ。

「南海地震が起きたときは、津波は堤防をこえるだろう、生徒は四階に集めよう。水と乾パン、救急箱、無線と毛布くらいはいるな・・・」

その後、市からの調査も入り、事務のWさんが、いい指摘をしてくれた。発電機を四階くらいに設置していないと、浸水した場合に電気が止まってしまうという。

海際の河口傍という勤務先校の特殊な立地条件を考えると、早く手を打つ必要がある。市内には他にも同様の公共施設があるようにも思う。

洪水被害に遭いそうな学校の数は知れているが、避難勧告などの連絡が市教委からなく、そのシステムも構築しておく必要がある。

しかし、その後、私は退職し、市は財政難である。

「大丈夫かなあ…」

自転車で中学校前を通る度に、私は、声の届かなくなった校舎を見上げている。

卒業証書を授与します

夜中の十一時過ぎに電話が鳴った。

寝入りばなであったが予想していたことでもある。妻と手早く着替えをすませて車に乗り込んだ。

大正十二年(一九二三年)生まれの母は、もう一週間ほども意識がない。酸素吸入のマスクをつけて眠っている。一昨日の夜は、私の当番で、朝まで病室で付き添った。今日は無理をいって弟に続けて付き添ってもらっている。

西神戸医療センターは、さすがにこの時間になると静まりかえっている。

「静かだったよ」

弟の声を聞きつつ、私は安らかな母の顔を見た。意識は戻らず逝ったらしい。

強心剤や心臓マッサージなどの延命治療はお断りした。酸素マスクも苦しそうだったが、これは外すと安楽死になってしまう。厳密にいうと、心臓マッサージなども行う必要があるらしい。だが、報道によると医師の半数近くが、私の母のように死期が迫っている場合は、肉親などの要望を聞いてそれをしないそうだ。

「苦しまんと、よかったな」

私は弟夫婦と妻の顔を交互に見ながらいった。

DVと貧困に堪えた生涯であった。

大銀行勤めの父は、四十歳くらいまで、毎晩泥酔して帰宅した。ビジネスの過酷さもあったのであろう。

真夜中に「味噌汁がない!」といっては卓袱台をひっくり返した。母を半端ではない力で殴り、ときには包丁さえ持ちだした。

私が小学校四年生くらいのときか、離婚を考えたこともあったらしい。

しかし、昭和三十年前後である。経済の高度成長はまだ先のことだ。女性の職場も限られている

し、なにより男の子が二人いる。

だから堪えた。そして私たちを守った。おかげで私たち兄弟は、あまり父に殴られたという思いはない。

私たちは大きくなると、父に手をださないまでも、母を守るようになった。暴力は下火になった。が、子どもがいないところでは生涯続いて、七十代になってさえ、時折は殴られていたらしい。

私たちは、父とは口をきくことさえ、ほとんどなかったから、実質、母一人に育てられたようなものである。

母の輝やいた一時期もあった。

四十歳前後のときに、NHKの「漫才台本コンクール」に入選した。思わぬ母の一面である。「お浜・こ浜」「いとし・こいし」といった方の台本を書く。お昼のバラエティ番組の台本を作る。放送作家として放送局にも度々出かけていた。

ところが、私が二十歳の夏、父は銀行の取引先企業の手形に裏書きをした。つまり連帯保証人である。案の定、経営者は姿をくらまし負債が父に被さってきた。銀行は退職金なしの依願退職扱いとなり、住んでいた家を含め資産はすべて取り上げられた。

たちまち困窮した。

「きーちゃん、お米ないわ」

といった母の声が耳の奥に残っている。私は、希理という。母から「きーちゃん」と呼ばれていたのである。

米を買うお金さえなかったのだ。母は衣類や、集めていた切手など、売れるものはすべて金にかえた。

父はミシン場という自営業をはじめた。縫子さんを雇って靴の縫製をする。だが、素人の経営はそう簡単には進まない。母は仕事の手伝いと家事で、台本書きどころではなくなった。

私は大学を中退し、弟は大学進学を諦めた。

その後、結局、ミシン場は廃業した。

父は倉庫会社に職を得て、貧しいながらも生活は安定し、まずまずの暮らしが続いていた。

連帯保証人事件は、何らかの解決をみたようで、父は銀行からいくばくかの退職金を受け取った。

母は、その中から、私と弟に「苦労をかけたね」と五十万円ずつを渡してくれた。当時は大金である。

私は、それを入学金にして、大学に入学しなおした。学費も生活費も稼ぎながら、二十七歳で卒業し、幸い教職に就くことができた。弟も公務員試験に合格し、安定した生活が送れるようになっていた。

三十年あまりが経過した。母は八十歳になる前後から、認知症になり、要介護度五という状況になった。

入所した施設に弟と交互に見舞いに行く。

「おバカたん」

母は、私の顔を見てそういう。もちろん、もう私が息子とはわかっていない。ときに、自分の実父に見えたり、父に見えたりもしているらしい。

「バカちゃいまんねん、アホでんねん」

と、私が応えるのは、母の血を受け継いでいるからか。母がにこりとするのが嬉しい。

その母が亡くなった。

三月十一日の夜明け前、星が寒さに震えていた。

母の遺体を葬祭会館に安置すると、後を弟夫婦に託して、私と妻は自宅に戻った。

午前五時である。

「とりあえずコーヒーでも飲もうか」

温かい液体が、喉を通り食道に落ちていく。

不意に涙がにじんだが、私は口を固くすぼめて、それからゆっくりと息を吐いた。

小一時間仮眠して、妻の運転する車で、校長として勤務する中学校に向かう。今日は卒業式なの

だ。

教頭先生と事務職員に母の死を告げ、後は固く口止めした。葬儀も親族だけの密葬にする。

卒業式場を最終点検し、モーニングに着替え、来賓を迎える。校長として祝辞を受け、会場に案内する。着席を見届けると、舞台を挟んで反対側の職員席に移る。

卒業生の入場を笑顔と拍手で迎える。

開式のセレモニーが終わると、すぐに「卒業証書授与」である。

団塊の世代である私の時代と比べ、生徒数は少ない。それでも二百人あまりの卒業生に証書を手渡しするので、一時間近くかかる。

呼名は担任がする。

昔ある学校で、名前をとばされた生徒がいて、泣きだしたという話を聞いたことがある。だから、担任にとっても緊張の作業なのだ。

私は、よくクラスの生徒に先にいい訳していた。

「ええか、先生、絶対名前とばせへんけどな。それでも万一とばされたらどうする」

生徒たちは不安な顔になる。

「黙ってすっと立つ。そしたら、まあ前後くらいの生徒にしかわからへん。あれっと思った者も知らん顔する。そしたら、大騒ぎになれへんのやで」

とまあ、自分のミスをカバーする方法である。だが、こう話しておけば、子どもたちも万一の場合の心の準備ができる。ダメージが少ない。

もっとも、何回か経験した卒業式では、紙に書かれた生徒の名前を一人ずつ押さえ、顔を見て必死で呼名してきた。幸い事件は起きていない。

卒業証書の授与は人生の一つのステージをあがることにつながる。その大切な儀式である。静まりかえった館内で、ゆっくりと一人ずつ子どもたちの顔を見、「がんばれよ」と声を未来の夢につないでいく。

「卒業証書を授与します」私の身体は緊張してい

る。一人ひとりの目を見、神経は証書の手渡しに集中する。

終了すると、一旦降壇する。

職員席に座ると、瞬間、時が停止して、母の顔が浮かぶ。

だがすぐに、「校長式辞」である。

来賓席・保護者席・国旗に腰を折り、登壇するとポケットから式辞を取りだす。

パソコンで打ちだしたＡ４の紙を、のりで貼り合わせた巻紙。それをそろそろと開く。奥歯を噛みしめて、文字を見つめ、ゆっくり言霊をはきだした。

季節の挨拶、枕詞、そして贈る言葉。誰も校長式辞の内容など覚えてもいないだろう。それでも文章の一片でも心に染みこむことを願いつつ読む。

来賓と地域の方々へのお礼、保護者への言葉が締めくくりである。

式が終わると来賓を控え室に案内し、挨拶する。そのまま片付け中の職員に無事終了の礼をいい、再び着替えると、迎えに来た妻の車に乗り込んだ。

普通なら、休憩の後、来賓の先頭に立って校門に出る。各学級に一度入って別れをした後、出てきた卒業生を送りだす。それからまとめの職員会である。

卒業式は時間がゆっくりと流れる。卒業というのは区切りなのだ。人生の一つの課題を達成した証拠といってもいい。

だが、この卒業式の日、私の時間は目まぐるしく過ぎていた。ほとんど眠っていないにもかかわらず、ピンと心の背筋がのびているのがわかる。

葬祭会館に直行した。

笑いが好きであった母の顔はさらに穏やかだ。弟夫婦と私たち夫婦、そして六人の孫たちだけで通夜も葬儀も、うんと楽しく賑やかに行うつもりである。

義妹の淹れてくれたコーヒーを口に含む。

私は、三月三十一日で三年早く退職する。

その退職という卒業式を目前に、母の人生の卒業式である。母は二人の息子を、口はばったいが、きちんと育て上げてくれた。

その卒業式が、校長として臨む、教員生活最後の卒業式と重なる。

「お母ちゃんは、イタズラ好きやったさかいにな」

弟がいう。

（卒業証書を授与します）

私は心の中で呟きながら、コーヒーを飲みくだした。少し、しょっぱい味がした。

ここからへりくつ　おわりのはじまり

ワクワク残日

緑寿を超えた。緑寿というのは、二〇〇二年、全国百貨店協会が六十六歳を「緑寿」と提唱したことが始まりである。

「みどり」という漢字「緑」は「ロク」即ち「六」である。六十六歳は「ロクロク」「緑・緑」なので緑寿とゴロあわせだ。

またこのころから世界的に自然環境への関心が高まり、新しい賀寿祝として提唱されたらしい。まあ、六十歳定年は六十五歳定年に移行しつつあり、前期高齢者の始まりである六十五歳以降の「明るく元気・積極的な社会生活」を願っている意味もあるそうだ。

六十歳の還暦祝いはよくやるが、確かに社会情勢から見ると六十六歳の祝いはいいのかも知れない。

因みに高齢者の定義はバラバラだが、世界保健機関（ＷＨＯ）は六十五歳以上の人のことをさしている。

節分の巻き寿司丸かぶりではないが、新しい風習として、めでたいこと楽しいことのイベントは、こだわらずに行いたいと思う。

私の場合、少し変則的だが定年より三年早い退職である。退職後、若いころからの夢であった小説などの創作に専念しだした。童話や小説、詩などは少ないながら書いてきていた。東京の出版社から上京しないかと勧められたこともある。四十代ごろにパソコンを始めてネットが広がりだすと、ＨＰも開設していた。ここには「随筆」を五、六百本もあげている。この冊子の中にもそれから書き改めたものがある。

※

随筆には苦い想い出もある。

［校長という、教育者のひとつの「最終目標」まで来させていただいて嬉しい。「がんばるぞ」という気持ちもある。しかし、この先の大変さが目に見えるだけに、「ただ、淡々と取り組もう」という意識だけが次第に強くなっていった。］

とＨＰに書いた。それが、ある人に目をつけられた。「校長になったのだから、もっと喜ばないといけない」というわけである。その人から指摘を受けて市教委の先生が私を呼びだした。なんと私のＨＰから「随筆」をすべてプリントアウトしている。ごつい紙の束を全部点検したのか、うんざりしている。目を白黒する私にＨＰからの削除を命じた。どう考えても問題になる表記ではない。「無茶な」と思いつつも、私は逆らわなかった。といっても腹が立っていたのだろう、結局帰宅したらＨＰを閉鎖してしまった。

市教委の先生もご苦労な話である。理屈の通らない自分の感情のままに動く、モンスターユニオン、モンスターペアレンツに、モンスター議員、そしてモンスター上司に四苦八苦しないといけない。

この先生とは、校長赴任前に聞いていなかった驚天動地のような事件や不適応教員についても話したことがある。私などは世渡り下手なので情報が入らない。といって校長として赴任させるならばシステムとして情報提供をしてそれを支えることが必要だと思う。

教員人事は難しい。不適格者は先生全体のほんの一部なのだが、先生は先生以外に使い道がない。そしてそれは児童･生徒の人数に対する定員の中に含まれてしまう。授業をさせないわけにはいかない。それで、その教員は回り持ちに押しつけ合いになる。ある校長が必死で大きな問題を持つ先生を他校に移しホッとした。すると翌年そこに自分が行くことになったという情けないお話もある。無理難題を取り仕切る市教委の先生方もしんどい話である。だが、こういったことに振り回されて結局、

肝心要の子どもたちのところまで目をやる余裕がない。本来学校を支えねばならないシステムが機能しない。

教育委員会システムもだが、学校制度そのものが実は疲労を起こしている。なにせ戦後七十年あまり。鉄筋ビルでも設計寿命は五十年だ。

（おいおいビルとシステムを一緒にするな…。一緒でもいいか…、いやむしろシステムの方が劣化が早いか…。それも鉄筋ビルならメンテナンスするが、教育委員会システムは七十年メンテナンスされていない。うむ、むむむ。社会が高度成長から低成長、失われた二十年、高齢者の激増、世界は中韓の台頭、イスラム世界の混乱と大変化しているのに、な、なんと教育のシステムは、なかでも教育委員会制度は全くメンテナンスされていない…。こ、これはもう無茶苦茶だ、うん）

※

夢の計画

この随筆に取り上げた中で、教育委員会システムについてはいま改革が進められつつある。

私は教育に関してはこのように考えている。まず教育こそ人間が人間として存在する根幹なのだ。

その政治思想は左右中道でなければならない。そしてその根幹には「倫理哲学教育」が必要だと思う。この場合「哲学」は「生きる意味の知的追求」「人間性の追求」「倫理哲学の確立」という根本原理である。現在は柱が何もない。その上で系統的・総合的な学習システムが必要であろう。それは基礎的知識を十分に学んだ上で、「考える総合学習」へと移行する。円周率を端折り、現代史をすっ飛ばしていたのでは、「総合学習」は砂上の楼閣である。

義務教育については、その期間を個人的には前後に三年ずつくらいのばしてもいいように思う。一つは寿命が半世紀で三十年ものびた。一つは、情報量が飛躍的に拡大して、地理的空間が拡大した。

当然、この世界で生きていく知識と基礎的な経験の必要性が増大している。

現在は六歳から十五歳までの義務教育だが、三歳から十八歳までにすべきである。「宇宙世紀」に必須だと思う。第二次性徴をほぼ生物としての人間完成と考えるならば、それからの精神的発達に鑑み中高を一貫とし、九・六制でどうであろうか。

ついで「安易に卒業させない」学校を作ることである。それはいわば学校と国に責任を取らせる仕組みである。大学が「入れば出られる」という我が国の欠陥は有名だが、初等・中等教育もまた同じである。先生たちは分数ができないまま、中学、高校へ、さらには大学へ、児童・生徒を送りだすのを苦痛に感じている。ところがどうにもならない制度疲労の中でその感覚が麻痺し、諦めになりつつもある。六・三制から九・六制にのばした十五年間の義務教育期間の中で、留年や飛び級を弾力的に運用すればよい。

平成十二年の東京大学学生生活実態調査ではほぼ半数以上の家庭の年収が一千万を超えている。格差の拡大による階層の固定化は社会の硬直化、閉塞化の意味である。それは既得権化の進行である。そして社会の不安定化をまねく。江戸時代後半以降の藩政改革、特に教育改革が明治維新を推し進めた事実を思い出すべきである。それはやはり百年の時を必要とする。

先生の質を確保するには、現場での評価を徹底する。不適応者は、他の公務に回す。子どもとの人間関係がうまくない、築けないままの方が見られる。これは本人にはシビアだが転職方法を考えないといけない。通常、先生と子どもは強者対弱者になる。また先生は大人の見本でもある。「聖職者」を押しつける気はないが、そうであろうとするべき努力を欠き、人間性を著しく欠いた場合、子どもの人格形成にとって致命的な傷を与えるからであ

る。教科の専門性を問うことも必要だが、なにより大人の手本として、自らも成長しつつ人の道を説けるものでなくてはならない。

また、「合理的」な「知の教育」も必要だと思う。細かい知識ではない。前述したが具体的にいうと理性的な心身教育である。

二〇一四年十月十三日の朝日新聞によると、一九八五年が子どもの体力のピークである。それまでは「根性」体育であって、それが否定された結果、体力の二分化が進んでいるらしい。それは楽しく納得しつつ行える技法を、体育大学の先生も、教員も掴めていないと言うことである。彼らはもともと根性を通して先生になったのであり成功体験者である。その方法に執着した結果、弱く下手な立場の子どもたちへの新しい方法を開発出来ないでいる

ボールのドリブルがどうとか、猛烈なサーブができるとか、逆上がりがどうか、打ち方とか、跳び箱が上手い、走りが早いか遅いかとかに拘泥してしまう。まず「誰でも、簡単にできる運動」、つまり身体作りこそが基本であろう。技術や根性は苦手な子どもには苦痛でしかない。「スポーツを通じて柔軟性を身につけましょう」というが、それは「技術を習得して、シゴキといじめに耐えて」ということに成り果ててしまっている。

例えば風船バレーボールはどうだろう。技術は関係なくレシーブも怖くなく、しかも身体はイヤという程動かせる。ストレッチと筋トレにもなる。そしてルールも身につく。智慧を働かせば、そういった基礎的体力を楽しく伸ばせる方法はいくらでもある。それが出来た上で各種競技の技法に進み、興味関心のある種目の子どもには多少の根性スポーツは必要であろう。

このように、客観的に何が本質であり、何が最も基本であり、どうすればいいかを考えていく「知の教育」が教育者に必要である。総ての物事の本質

はシンプルであり、誰にでも出来うることである。それはどう生きるべきかを考えていくことにつながる「哲学教育」でもあろう。

最後にその「哲学教育」である。戦前の反省から宗教教育は否定されねばならないが、日本には神道・仏教という精神性のバックボーンがある。これはすべてのものに「存在性」を認める哲理・哲学である。人の道を説く倫理・道徳である。宗教ではない。

宗教行事化したものを学校教育に取り入れてはならないが、その思想性は大切であろう。「人生の意味」「生きる意味」を捉えるためにしっかりと「哲学的」にその思考を教えていくべきであろう。魂のない教育は存在しないと思う。神や仏を礼拝せよというのではない、「知の目」で、しっかりとあるべき姿を見つめる教育が求められると思う。

※

この随筆を書きながら、「ふむ、ノベライズ」してもいい題材だなあと思っている。石川達三の『人間の壁』の時代から半世紀が過ぎ、なにもかも私の身体のように劣化している。心だけでも新たな息吹を吹き込んでみたい。私の「おわりのはじまり」である。しかしまあ、死ぬまでにこだわって、こだわらずに書き続けようと、のんびり考えている。

・短編小説集『エスプラネード』
コシーナ文庫　石川希理著
※アマゾンでご注文下さい。６９８円

校長になるには

二〇一四年、平成二十六年現在、小学校では管理職のなり手が少なく困っている。特に地方がひどい。小学校の学校規模は小さく、地方に行くほど地域面積が広いので多数の学校が必要になり、その規模は逆に更に小さくなる。つまり職員数は少ない。一学年二学級程度というのは沿岸都市部では当たり前の規模だが、職員数は十数名。しかも残念なことに、女性の社会進出は遅れているから、六割を占める女性教員はほとんど管理職になりたがらない。地方にはこれより小さな小学校はざらにあるが、そこでは男性教員は数えるほどになる。

過度の平等主義、効率主義への警戒、既得権の擁護が先行する教育現場では、校長は実質上ただ独りの管理職である。しかし実際は名誉職に近く権限はなく責任だけは問われる。名誉職であるから地域の会合には夜もでないといけない。この随筆にあったように祭りでは演歌を櫓の上で歌わなくてはならないこともある。(笑)しかも大切なことだが、校長になってもならなくても月給がほとんど変わらない。こうなると女性はもちろんたが、男性にとってもあまり魅力的ではない。そういうわけで地方の小学校では、男性であればだれもが「管理職にならないか」と声をかけられるという状況になっている。社会経験も人間性も知識も経験も何も問われない。したがってそれなら「民間人校長」でもいいではないか。教育者でなくてもつとまるではないか。むしろその方が校長権限を強くして、管理していくにはいいのではないか。そういう議論に進んでいく。

断っておくが、私は民間人校長は賛成である。ただ教員経験は必須と考える。子どもという人間に触れあう、そして育てる組織には、その経験がない

と知識や理屈だけでは対応出来ないからだ。民間人校長の利点は認めるので、最低一年は「学級担任」を勤めてから登用するようにしてもらいたい

さて、『校長になるには』資格は何もいらない。規定が緩められた。極端に言えば、教員免許も運転免許もパスポートも。高校も大学も出ていなくてもいい。独身でもいいし、教育関係者でなくったってかまわない。

「あ、だから民間人校長ってあるのか」

でもまあ民間人、社会人校長にはいろいろ問題が多い。

その昔、全国に初めて民間人校長ができた時代は、導入した有名な政治家が力を入れた。教育委員会だって懸命にバックアップの体制を整えた。だから民間の方は、問題の少ない学校に赴任し、さらにその学校にはサポート体制があり充分に活躍できたといえる。

民間人校長が多くなると、一人が赴任するのに教頭先生を差し替えたり、力のある先生をそろえたりするサポート体制は組めない。平成十五年には、国旗・国歌をめぐり教職員と対立したある県の民間出身の小学校長が自死している。もちろんよい学校を選んでというわけにもいかなくなる。

「小中にも、いい学校ってあるの、悪いのも…」

自明の理だが表だっては誰も何もいわない。しかし公立小中学校であっても名門校もあるし、地域格差は大きいのだ。一般的に山の手の住宅地では保護者は経済力もあり、高学歴者が多い。下町では、経済的に厳しくて就学援助を受ける家庭が四割以上、子どもに目が届きにくい家庭が多いというところもある。

「はあ…一割？」と目玉を剥いた覚えがある。

ある住宅地の中学校だ。地域にはサラリーマンの一戸建てと、比較的経済的に恵まれない方の住宅が混在している。

そこの新入学生は、一割が私立の中学校に進学する。つまり成績のトップグループがいなくなるのである。通常、中学校の集団は、成績がなだらかな正規曲線を描く。ところが上位グループがいなくなるのである。家庭的に恵まれ勉強ができるものはスポーツもできるし、リーダーの要素も強い。それが欠けた集団は歪なものになる。

そういったデータは本来教委が細かくチェックし、教員の配置や予算の分配に生かさねばならないが、分析や対策が取られたとは聞かない。まず苦情処理に忙しすぎる。またそんなことをすれば議会や保護者から徹底的に追求される。公然と教員の加配何ぞをすれば、あの学校はレベルが低い、地域が悪いということになる。なんと家や土地の不動産価値まで下がり、高所得高学歴層は出て行くことになる。いわばスラム地区ということになる。だから「公然の秘密」でやって来たわけである。

戦後、政治的中立を守るために、教育委員会制度が作られた。知事や市町村長が、自分の思うように、都合のよいように、つまり「恣意的」に教育を触っては困るからである。有識者を集めて教育委員会を作る。有識者は議会の同意がないと教育委員になれないから、特定の政治思想に偏らない。

「いい制度ですねえ」

「でもない」

法律だと、教育委員会は、次のような位置づけの仕事をすることになる。

『教育の機会均等、教育水準の維持向上及び地域の実情に応じた教育の振興が図られるよう、国との適切な役割分担及び相互の協力の下、公正かつ適正に行われなければならない』

『学校その他の教育機関を管理し、学校の組織編制、教育課程、教科書その他の教材の取扱及び教育職員の身分取扱に関する事務を行い、並びに社会教育その他教育、学術及び文化に関する事務を管理し及びこれを執行する』

有識者、例えば連合自治会会長のAさん、例えば連合婦人会のBさん、商工会議所会長のCさんは、医師会長のDさんは学校の組織について知っているだろうか。

「少し無理みたいですねえ。しかし、何でも知っている人はそうどこにもいないでしょう」

「確かにね。けれど学校は、社会常識と全く別の組織といえるのでね」

「常識が通じない…」

「そう」

例えば、残業代は出ない。

阿部くんと海江田くんが喧嘩した。人を育てる組織だから裁判のように一刀両断にはできない。といってどこまで関わるか。事件の内容、二人の子どもの性格、家庭環境、友だち関係、明日からの指導、すべて勘案してかからないといけない。ある子に関わるのは担任の先生だけではない。情報の共有と関わり方は難しいから先生同士でも会議や話し合いが多くなる。

また、授業準備のための資料作成は、どこまでを対象とするか、どこまで深く掘り下げるか、それは学校・学年や子どもの質によっても変わってくる。部活動でもどのように、どの程度まで指導をするかは教員個人の熱意で左右される。つまり先生自体の自発性・熱意・力量によっても大きく左右される。家庭に持ち帰って試験案作りや採点、学級だよりを作成している。土日は部活動指導に連日出ていく。こういう特殊性があるから残業は一律、教職調整手当四％でお茶を濁している。

そういった状況を教育委員は把握できない。

そのために教育委員を補佐する組織が教育委員会事務局である。ここの職員のうち予算や施設や営繕といった部門は一般の公務員が行う。だが、学校の教育活動という肝心要の部分は書いてきたように一般の公務員にもわからないから、学校の先生が行う。これを指導主事という。一般の教員

から試験をして採用する。県の指導主事は市町村を指導するから別組織だ。市町村の指導主事は試験は「一本釣り」という形で採用することが多い。

補佐する組織が教員でないとつとまらないというのは、それだけ教育という営みが特別なものだということでもある。この補佐する指導主事をまとめるのが「教育長」である。ネーミングがこの場合問題である。

「教育長」と聞くと、その自治体の教育のトップという錯覚に陥るが、法的なトップはあくまで教育委員会の教育委員から選ばれる「教育委員長」なのだ。「教育長」とせずに「事務局長」にしておけばよかった。「教育長」としたので一般社会も、さらに本人さえ最高責任者と錯覚してしまう。そしてなにより、教育委員は現場のことがわからないから名誉職化した。場合によると名誉と手当の利権化になりかねない。この委員会、「教育長」にとっては都合がいい。法的な最終責任は「教育委員会と教育委員長」が負うわけである。形骸化した名誉職を支える事務局という組織が実際の仕事を責任を負わずに行うことが可能になる。

ところが苦情処理に追われて本来の学校や校長、教員へのバックアップという仕事が不十分になる。仕事では学校間の格差や指導力不足教員ばかりが目に付くから、指導主事は問題の多い学校には戻りたくなくなる。もともと教育現場に強制はそぐわないから一般の教員の場合でも同じである。学校を異動する場合、その意志が最大限尊重される。組合もそれを最大の責務の一つと考えていて、都市部では指導困難校への異動者がいなくなる。私自身も同じであったのを反省している。問題の多い、家庭の貧しい、親の理解がなく、授業がしにくく、従って仕事が大変で、クラブの弱い学校に、同じ給料で異動・赴任したくない気持ちを責めることはできない。人間の醜さを許す学校・教委シス

テムに問題があるのだ。それを明るみにだして改善していかねばならない。学校制度と教育委員会システムに構造的欠陥があるのだ。

教育委員会事務局の一般の指導主事の先生方の名誉のために付記しておくことがある。先に少し書いたが、最近の地域社会の崩壊、家庭の教育力の低下、モンスターペアレンツの増加で、日中は苦情処理に追い回される。残業して事務処理をしているので、とても学校教育全般のことを教育者の目で見つめることができない。

さて、いま公立校の学力公開が問題になっているが、経験者としては大歓迎である。競争しないといけない。校長も先生も一生懸命だが、モノサシがないので、自己満足だけに終わってしまう。学校評価制度は導入されたが絵に描いた餅に等しい。評価委員は現在の教育委員会委員のような地域の名誉職で、機能していない。私は退職後大学に勤めて先進的なところの授業評価には驚いた。学生の授業評価がデータとして先生に配布され、一部は公開もされる。もちろんまだ給与や待遇にダイレクトに反映されていない。学生迎合になってはいけないので、第三者の冷静な評価も必要だが、こういう競争は大切だと思う。

「学生は甘い先生にはいい評価、厳しい先生には悪い評価をつけるぞ」

といわれる方がいるが、まず心配ない。

教育技術と人間性を、学生はちゃんと見ている。

中学生だって同じである。また保護者もそうだ。体罰だけ、怠惰な先生、無気力な先生は見抜かれ、逆に熱意とか知識、人間性、そういったものはきちんと伝わる。広くたくさんの意見を求めれば、平均的な公正な評価が出てくるだろう。現職のとき、人を育てる教育に点数評価は難しいと感じていたが、そうではない。きちんとしたシステムでの評価は可能だし絶対にこれからの日本にとって大切なことなのだと考えている。ただし義務教育の小中

学校では、前述したように「悪い学校」には、それなりの理由、経済的な地域環境がある。学力公開も、実施するなら学力の低い学校には優秀な先生を高めの給料で、高い学校の三倍くらい配置すべきだろう。できる子十人を一人で教えるのは簡単だが、九九のわからない子一人を教えるのは労力が途方もなくかかる。これは極端化したいい方だが、学校間格差を見据えればそういう結論になる。

教員組合のいう「自主的な教育意欲」を尊重し、生むための体制作りがいま求められている気がする。日本の未来がかかっているのだ。教育現場は特殊な世界なので、先生出身の校長でも悩む。そこに、サポート体制なく、落下傘降下のように先生でもない民間の方が赴任すると悲惨なことになるのはこれもまた自明の理であろう。敵地のど真ん中に一人降下したら、殺されるか捕虜になるしかない。

次に通常、校長先生はどうやって誕生するのだろうか。

例えば、中学校では、中学校教員として勤めて、大都市では四十歳から五十歳前後になると管理職試験を受けて教頭になる。教頭になって二校くらい回ると、校長試験を受けて校長になる。ずっと先生一筋なので、二十二歳から「先生」と呼ばれて、退職まで先生である。これは少しまずい。例えば会社や公務員の組織では何か物事を実施するのに稟議書（決済書）が必要なのだが、まず書いたことはない。係長や課長や部長の指示を受けたことがない。物品の購入も、相見積もりをとり、あるいは入札するといったことはほとんどしたことがない。作った試験問題はノーチェックである。最近でこそ、小学校では通知表は校長に見せるようになった。だが妙な文章の書類が大手を振ってまかり通る。学校現場は誰にも点検されない個人プレーの世界なのだ。「書き直せ」と書類を突き返された人

はあまりいないであろう。組織はあるが個人優先の調整組織でしかない。

校長になるには前述した一般の人が考える先生から教頭そして校長へという以外に前述した市町村の教育委員会の指導主事に出るという方法もある。つまり市町村の教育職員になる。

もともと先生は都道府県や政令指定都市（横浜・京都・福岡といった都道府県と同じ権限を持った大都市）の教育職員なのだ。少し長くなるが、義務教育は国家の大切な基本的な教育機関である。だから国のお金が投入されて、内容、水準が公平に一定になるようにシステム化されている。当然先生の給料も国と都道府県が半分ずつだす。だから採用も都道府県単位で行われる。レベルをそろえよう、情実が入らないようにしようという工夫がされている。もし小さな村で先生を採用したら財政力の差で給料が違ったり、一定のレベルの先生が採用できなくなったりする。村の有力者から「あいつを採用しろ」なんて嫌なニュースのようなことになりかねない。現在のシステムでも時折問題が起きているらしい。それで小中の義務教育の先生は都道府県が採用して、給料も国と半分ずつだすという仕組みにした。その都道府県の採用者の中から市町村が必要な先生を確保する。ただ小中学校を建設して、維持・管理運営しているのは市町村だから、日々の業務や先生の指導は市町村が行うことになる。

複雑な仕組みになっている。

そして、この仕組みの中では、小中の先生の意識は都道府県の方を向く。採用試験も給料も都道府県だから、仕方がないことになる。さらに国家の教育方針に則って義務教育は行われるから、目的や理念も、指導方法も国や都道府県が決める。こうなると、現場の義務教育小中学校の先生にとって、「市町村の教育長？　はて、誰だろう？」という意識になるのは必然である。蛇足だが、市町村

立の幼稚園や高等学校は、義務教育ではないので、市町村の教育職員になる。給料も市町村から出る。

小中の先生は市の教育長の顔も知らない場合が少なからずある。

「校長先生、なんや変なおっさんが、『校長室どこや』って聞いていました」中堅の男性先生に教えられた。その変なおっさんが市の教育長であった。実際に私の勤務中のできごとである。

些か脱線気味だが、校長になるには、①現場の先生ー教頭ー校長のルート。そして、②現場の先生ー市町村の指導主事ー係長・課長（主任指導主事）ー校長の二つのルートがあることが理解していただけたと思う。市町村の指導主事で現場から離れても、毎日自分の出身市町村の学校のことを仕事で扱い、現場の先生と常に接触しているわけで、それほど現場からずれることはない。

だが、③都道府県教委（以下県・県教委）の指導主事ー主任指導主事ー校長のルートになると事情が違ってくる。これは県の試験を受けて、県の教育職になるか、県の行政職員になるかというルートである。県の教育職なら身分はそのままであるが、行政職になると身分が変更になり給料も下がる。これは社会教育の現場に先生経験者が必要なために作られたと思われる。社会教育というのは教育委員会の所管になる図書館、博物館、公民館などの社会教育施設における活動を意味する場合が多い。いずれにせよ、県の試験を受けて指導主事に採用されると、教頭試験に合格したのと同じ意味合いになる。

この③は市町村の現場からは全く切り離される。市町村を指導する立場になる。そして報告は県や国に行うという形になる。

例えば私は県の幼児教育機関に配置されたが、そこでは県全体の事業を行う。市町村とも協力するが、文科省などの指示を受ける。

この仕事を勤めていると、やがて主任指導主事という肩書きがつく。これがつくと給料と職階があがり、学校現場の校長職になったことになる。

私の場合でいうと、「主任」がついて、出身市の現場に戻るとどこかの校長になる。ところが校長職に空きがなく年齢的に退職までまだ少し余裕があるという状況で、市役所の管理職になり課長を務めることになった。これが今回は取り上げなかったが随筆「まことに悪いが異動を命ず」の背景である。ただ、断っておきたいが、県の指導主事は管理職扱いだが、一般的には部下はいない。私は主任になったがやはり部下はいなかった。その意味で、市役所の係長、課長職の経験は、人生の大切な財産になった。改めて、予算の重要性、人事管理、部下の掌握、組織の在り方を学んだ。三十万都市の市長や現在は副市長という助役との重要決済書類のやり取り、議員との交渉、市議会での初めての答弁、他部局との連携、市民との対応などである。

教育関係者だけでなく市の公務員の方々とも知り合いになれ、慣れない管理職をずいぶん助けてもいただいた。先生と異なり組織の中で動き、組織で動くことの重要性も教わった、改めて深く感謝したい。

しかしまあ、県に九年、市の学校と関係ない部署に三年、都合十二年間、学校現場から離れていては、状況はわからない。県の指導主事仲間とか管理職の間では、こういう人間を「浦島太郎」という。「島流し」という人もいる。おまけに勤めたことのない学校、その地域となると、これは最も基礎になる人間関係がない。そのためのサポートをするシステムもない。丁度、いま問題になっている民間人校長に近い。その中での想い出話がこの随筆集である。

解説　『校長失格』

阿倍野友之

ＪＲ北海道の事件をご存じだろうか。

これは現在進行形のできごとである。列車の脱線や出火が続く。二〇一四年二月、ついに警察が本社などの捜査に入った。管理職の指示や黙認など、部署によっては上層部が関与して、なんと基準を超えたレールの異常を放置し、監査の際にはデータをねつ造。その数が半端ではなくて組織全体の「闇」ともいわれている。

「カネの問題ではなく慢性的なサボタージュがあったことを窺わせる。……ＪＲ北の幹部は、『彼らのやる気のなさはひどい。いかに働かないかということにばかり腐心している』と口を揃える。」（ダイヤモンド誌）

労働組合問題である。この文庫『校長失格』を読んでいて、共通する課題を垣間見た気がした。労働組合は必要だが、力を持ちすぎたり、チェックがきかない場合は暴走する。

「解説をお願いしたい」と依頼を受けた時と、最終的な随筆集の中味がだいぶ異なっている。それはあまりに生々しすぎる随筆を数編削ったからである。したがってこの随筆集では、切り込みが浅く、読んでいて背景が掴みにくい部分もある。それでも文章の背後から学校の抱える問題が浮かび上がるのは、随筆がよく書かれていることと、問題が大きく多すぎることの証なのであろう。

先生の仕事は、組織として動くというよりは、現場で個人的に「子どもを育てる」ということである。その目で見れば、幸いなことに大多数の先生方は健全に懸命に仕事に臨まれているようだ。

ただ、教育は個人の人格の完成だけでなく、国民の委託を受けて、日本国民という組織人を育成

するという観点も大きい。不毛な日の丸論争があり、現在もまだ少し「君が代」で起立するしないがあると仄聞する。この軸になってきたのは教員組合である。校長を管理職として認めない。みんなで決定するという、崩壊したソ連式の共産思想が長年、日本の教育界を覆ってきた。

一般の先生は、高い組合費に頭を捻りながら組合が獲得した自由や、経済的利益に満足してきた。それは高度成長期の日本にあっては大部分の国民が享受したことであり、教員組合だけの成果ではなかった。その錯覚は労働組合や各種組織が利用してきたことである。

先生の無関心と錯覚をいいことに、組合幹部は「労働貴族」と呼ばれるようになる。「日の丸反対」と叫んでいた組合幹部が、校長になるとケロリとして「日の丸掲揚」を勧めるという歪な姿がまかり通ってきた。

一方、名誉職の要素が強い教育委員会を隠れ蓑にして、教育委員会の事務局上層部は組合と癒着し弛緩していないだろうか。福岡県では出世に対する賄賂事件があった。既得権と自分の天下りに関心がいってしまう。文科省のキャリアが学校法人などに天下りするが、地方の教育委員会事務局の幹部は、やはり関係する諸機関に天下る。

この随筆を読むにつれて、じんわりと問題が浮かび上がってくる。

組織の緩みの中で、石川希理に尋ねると、学校現場では人間と社会の問題が凝縮して、頭を抱えることが多かったそうだ。

・私立高校の入学金を納める直前になって、子どもが「お金がない」といいだした。慌てて夜に自宅を訪問すると父親が「一五〇〇円しかない」という。

・「先生、ホテルいこうや」と若い女性教師が中三生に肩を抱かれて、退職していった。

・「先生、Ｆくん昼食べてない」といわれて慌てた。自宅に行くとガスは止められキャンプのバーナーでインスタントラーメンを煮ていた。
・コンクリートの土間の片隅に畳が一枚あり、そこが彼女の勉強部屋兼食堂兼寝室であった。
・音楽室や放送室が占拠され、学年主任がワイシヤツを血で濡らせて職員室に戻ってきた。
・母子の自殺があり、海での溺死があり、校舎からの転落があった。
・事務員と、教員が使い込みをして、先生方が頭を下げて回った。
・修学旅行に引率すると、三日目には校長以下全員の目に隈ができて、パンダ軍団になっていた。
・砲丸投げの球が頭を直撃した…。
・サラ金、ＤＶなどで「在校していないことにする」生徒の対応に追われた。
・万引き生徒の引き取りは夜になっても学校の仕事になっていた。
・職員会議は居眠りの場所。実習室でコーヒーを飲んだり、グランドで部活指導をして会議に出ない先生もいた。
・「葬式ごっこ」事件が報道されたが、いじめに加わるどころか、いじめをする先生も残念ながらいた。
・小学校は学級王国で、崩壊するまで誰にも状況がわからなかった。

とまあ、高度成長期から低成長期に移る一九八〇年代前後の激動する学校がある。

それぞれどのような経過を辿ったのか興味のあるところだろうが、それはまた石川希理のこれからに期待したい。

この『校長失格』では、石川希理の様々な経験を通しての、学校の様子、さらには管理職の驚くべき状況が活写される。もっとも希理が校長になる以前、組合の力が強い時代には、小学校に校長が赴

任すると、職員室の会議では、一般教員と同じ席に横並びで校長の席が配置されていたという。

当時は、「職員会議」が学校の最高議決機関で、合議制で物事が決まっていた。だから、卒業式では日の丸は教頭があげねばならず、君が代は演奏できなかった。やっと君が代が流れだしても、それはカセットテープを、教頭が司会をしながらボタン操作していた。先生はほぼ全員が組合員で、日の丸、君が代反対があたり前であった。

希理の校長時代は、ボタン操作は係の先生の仕事になった。人事評価も、組合向けと教委提出用と二種類あった。組合向けには全員「B」だが、教委向けには「A」を設けてもいい妥協ができていた。「C」はまだつけられない。だが教委向けの内容が組合に判るというのも驚きである。この随筆集から外された「びびりの校長」「勤務評定」には、教員世界の世間から隔絶された異質性が描かれている。

希理は若いころの短いが民間の勤務経験、さらには県教委での課員という部下の立場、市役所の課長という管理職の立場も経験している。だから、社長が社長室を掃除する感覚の「おそうじ」には吃驚したであろう。もっともこの「おそうじ」も残念ながら随筆集から外されている。

一般教員時代には意識にものぼらなかった奇妙な校長の立場が描かれている。「とじまり」をして回る話、校長名で完全に期日遅れの文書が知らないうちに出ているミステリースクール、台風の直撃を受ける学校に警備員や教員でなく、校長が一人待機するというまず民間では考えられない世界。「卒業証書を授与します」は彼の生涯の一断面である。校長として式辞を読む卒業式を迎える日の真夜中に母親が亡くなるとはドラマチックな話だ。

彼は四十八歳のときに胃ガンで胃を三分の二切除している。校長になってようやく一段落したこ

ろ、朝は食事後横にならないと出勤できなくなった。もちろん出ていくと朝の立ち番から元気に振る舞っていたが「こらあかん」と思ったらしい。三歳歳下の弟に相談すると「兄ちゃん、辞めな死ぬで」といわれた。

同じ市の校長だったF中時代の同僚の先生などは「もっと相談に乗ってあげたらよかった」といってくれたらしい。希理は後からそれを聞いて大変嬉しかったといっている。また「休職したらええねん」といわれる人もいたが「あと三年の校長が休んでも…」と、くそまじめ、律儀に考えたという。

退職を決断して一月に市教委に行くと、幹部の間で「わ、えらいこっちゃ」と大変だった。通常、前年末には管理職の異動は固まっている。それを過ぎるともう一度検討しなおさねばならない。

一番いいのは、全体を触らず穴埋めする方法である。勧奨という退職金に上積みする方法もなしにすれば簡単である。自主退職である。四月からの第二の勤め先も勧奨にしない以上、斡旋しない。

通常こういう扱いを受けるのは不祥事の責任をとってというケースだけである。

「すごい決断されましたねえ、と市教委の先生がいわれ、市役所勤務時代の行政職の仲間が餞別をくれたのが生涯の想い出になったという。

子どもの進学ローンやマンションのローンの残りを払い終えると老後資金は不安だ。といって健康にはかえられない。気分的・身体的にはずいぶんと楽になった。

その後は、先生仲間に助けられている。市の公民館（コミュニティセンター）の所長を第二の勤め先にしている人が多く、そこへの講演会講師には数十回も招かれている。ある先生が所長をする公民館には数回もうかがっている。最後は演題がなくなり「希理さん、同人誌の苦労の話をしてもろたらどうやろ」となった。主には児童文学・童話や小説に絡んで「自分史の書き方」とか「絵本の選び方・与

え方」、市役所課長時代の仕事に関係する「人権」の講話である。

校長を務めたD中にも、「生き方学習」の講師などで出かけて生徒相手にお話している。おまけに絵本の読み聞かせなどでは近隣市町に呼ばれたり、県教委時代のつながりで他市町にも出張している。「講演してみて自分の話が人に興味を持ってもらえるとわかった」と希理はいう。なるほど面白くなければ一度でオシマイ。何度も呼んでもらえない。「ありがたい」と希理はいう。兵庫県立星陵高校の先輩で、童話作家でもある先生の縁故で姫路日ノ本短期大学で非常勤講師や准教授を務めた。また現在は教え子の縁で梅花女子大学で、非常勤講師として「詩」などの演習をしている。いずれ彼の詩集が文庫で出るかも知れない。くそまじめに生きてきて、「いろんな人に助けられた」のである。

「ここからへりくつ　おわりのはじまり　ワクワク残日」には、「夢の計画」というのがある。これからの学校・教育、とくに義務教育をこうしたらどうかというアウトラインである。「へりくつ」とタイトルにつけられているが、これくらいの変化をしないと、なるほど新しい時代に合わないのかも知れない。

また、教員時代の小説化の話も出てくる。七十歳に近づいて彼は通信制大学の五回生だ。五回生というのは「落第」である、いまどきは「留年」というのだが、この冊子ができあがるころには卒業しているだろうか。飲みながら話していると、年老いて「現在を善く生きる」ように心がけているらしい。過去と現在と未来は「いま」にあるというのは、おしゃかさまの教えの神髄である。大乗仏教、上座部仏教のテーラワーダ、アドラー心理学やソクラテスあたりまで勉強し直して「一応、教育者として生きてきたのでいま一度、教育について、生き方について考

えてみたい」という。

できてよし、できなくてもかまわない、認知症にはなりたくないが、それも選べない。だとしたら一日一日を、どういわれようと、しっかり人生を見つめて生きたいという、それはもの凄くシビアな世界なのだ。

「ま、とんがらずに、ぼちぼちと」

ニヤリとした彼の瞳の中にいまがある気がする。これからの書き物が楽しみである。

初出一覧（再掲）

あとのまつり　神戸新聞　平成十九年二月五日（月）

修学旅行　神戸新聞　平成二十年六月二日（月）

◆タイトルについて（石川希理）

本文庫には、約五十万部も発行されている地元紙「神戸新聞」の随筆として採用掲載されたものが収録されている。もともとは書きため、同人誌に発表したものなどを含めて『あとのまつり』としてまとめた。完成して「校長失格」とタイトルをつけた。悔恨・反省。

阿倍野友之氏のあげられた70・71頁の箇条書きの事件の数々は、その顛末を書いていない。ほんの一部だが、どれもこれも悔いの残ることがらだ。校長失格、教員失格と唇を噛んでいる。でも現在も大学で教鞭を執りつつ、少しでも前に進もうとしているつもりである。

◆表紙絵

三十代前半の筆者ー棟近喜忠氏・画

アクトス臨時増刊号について

アクトスのＨＰにはアクトスの各号の他、本誌を含む「臨時増刊号」を五冊あげてあります。

http://actos2008.o.oo7.jp/　　※ＰＤＦファイルです。

検索窓から「文芸アクトス」と検索下さい。「アクトス」だけですと、スポーツクラブや薬の名前になります。臨時増刊号『校長失格』は、非売品ですが、頒価を一冊９８０円（送料込み）としております。必要な場合は①〒②住所③お名前④電話⑤冊数をご連絡下さい。連絡先は奥付の通りです。電話・ＦＡＸ・メール・郵便のどれかでお願いします。お送り致します。郵便振替用紙（払込料不要）を同封しますので到着後お支払い下さい。

文芸集団　Actos2008

文筆活動へのお誘い

◆『アクトス誌』年４回発刊
［年会費で各1部を送付。］

・作品をネットでお送り下さい。
・年１２０００円の会費以外に発表負担金とか雑誌の買い取りなどはありません。
・京都府・神戸市・明石市・小野市・福岡県等の会員がいます。

◆同人（創作希望）になるには◆
①下記宛てにメールなどで申し込んで下さい。→
②書類をお送りします。→③書類を返送下さい。
　発表人数に限度がありますので運営委員会で検討させていただき、可否を約２ヶ月後までにお返事します。
　※ご連絡・書類はアクトス活動以外に使用しません。
④入会可の方は手続きをして下さい。

◆連絡先　〒673-0031 明石市宮の上１－１７－６１４
大西方　アクトス編集室
Tel&Fax ０７８－９２２－４５６２
メール：actos2008@mbe.nifty.com

◆HPをご覧下さい。掲示板もあります。
http://actos2008.o.oo7.jp/（「文芸集団」アクトスで検索）
◆詩・短歌・俳句・川柳・随筆・紀行・自分史・小説・評論・童話・４コママンガ・絵・写真など、ジャンルは問いません。
［絵などは jpg などで掲載します。］
◆メール（携帯も可）での作品応募が原則です。無理な場合はご相談に応じます。ペンネームの使用をお勧めします。
◆奇数月の第３土曜日、午後に西明石で例会があります。
参加は自由です。［懇親会なども持ちます。］

◆ご支援下さい◆

読書会員（支援会員）制度。ご連絡下さい。
［２０１５年度より配付。**年会費は２４００円**］
※年４冊のアクトス誌と臨時増刊号などをお送り致します。
※懇親会など参加いただけます。またアクトス通信に「おたより」「感想」もお寄せ下さい。

石川　希理
いしかわ　きり

1947-2047

神戸市生まれ。梅花女子大学非常勤講師
日本児童文学者協会会員
文芸同人誌「アクトス」代表・編集者
◆文庫『エスプラネード』・文庫『一本　５００００円　天然知能水』(アマゾンで発売中)

総合文藝誌
アクトス　臨時増刊号
第６巻第５号・通巻第２９号

校長失格

平成26年11月15日　第1刷　発行
著　者　石川希理　［頒価］　980（送料含）
発行者　大西亥一郎
発行所　〒673-0031
兵庫県明石市宮の上1－17－614
大西方　アクトス編集室
電話（FAX兼）078（922）4562
メール　ninjinjin@nifty.com